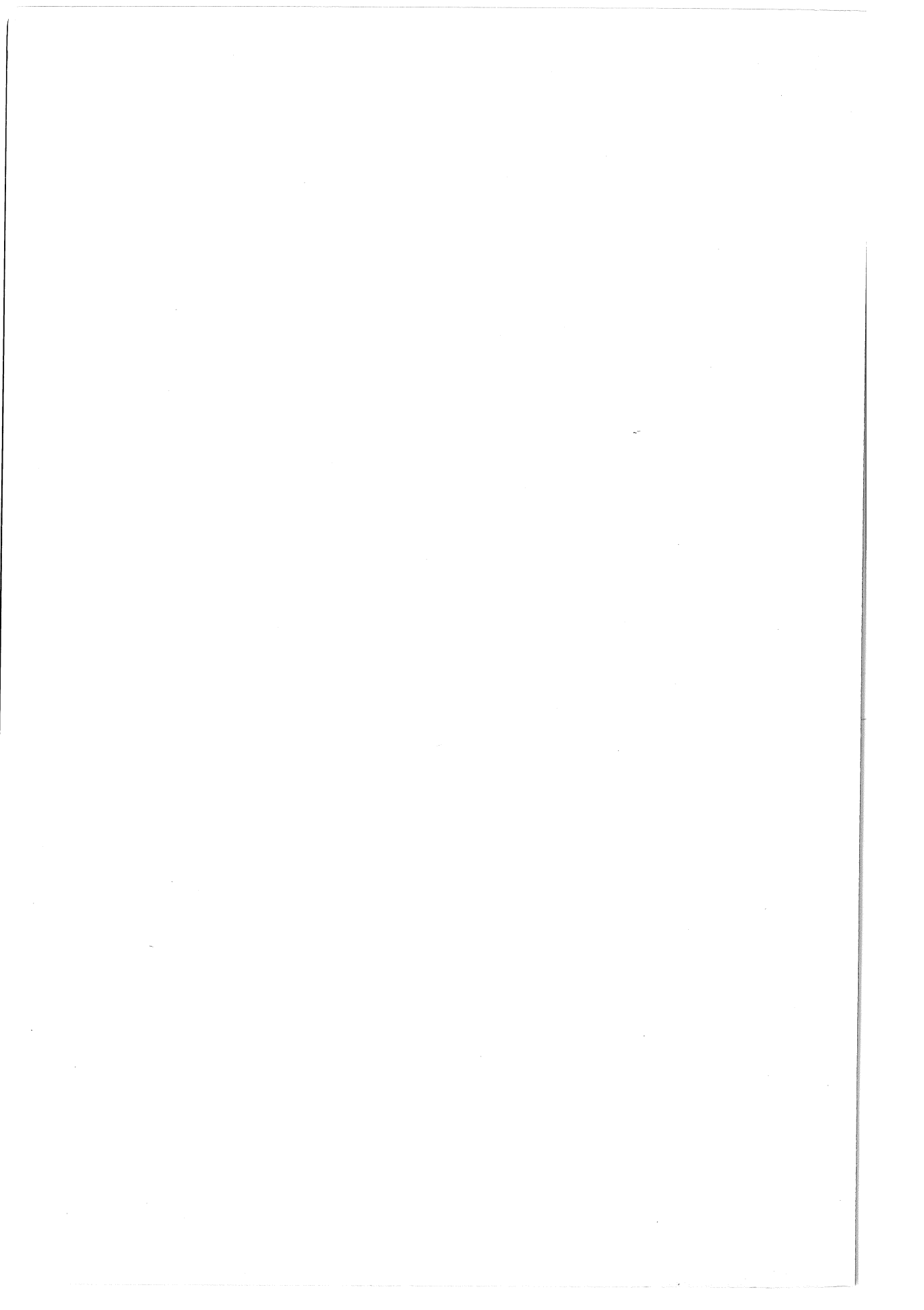


時報

Ⅶ

1 9 6 1

甲南山岳部・甲南山岳会



時 報

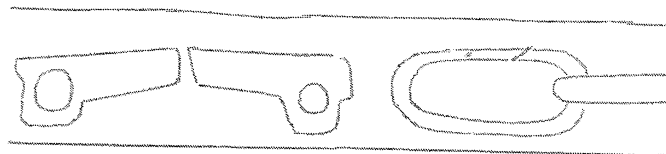
KONAN ALPINE CLUB

NO. 7

1 9 6 1

甲南大学山岳部・甲南高校山岳部

甲 南 山 岳 会

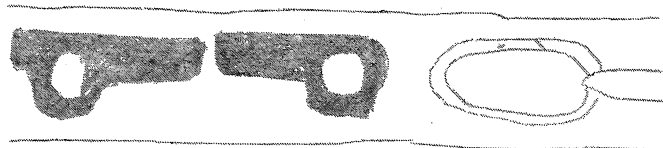


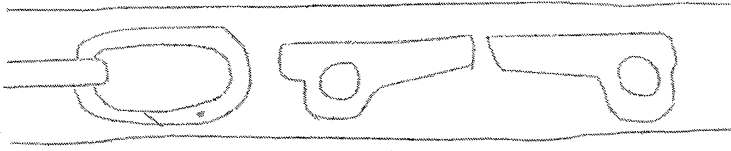
目

＝ 報 告 ＝

甲南大学山岳部

春 山 後立山 杓子東壁合宿 (1961年3月)	4
春山合宿日誌	CL.経3 大 関 和 夫 6
杓子東壁概念図	経3 大 関 和 夫 12
白馬鑑ヶ岳北稜上半	菅1 長谷川 恵 一 13
杓子岳東壁A尾根	経2 二 谷 和 成 14
B尾根	文2 鶴 木 洋 15
D尾根	経3 大 関 和 夫 17
食糧、装備、あとがき	18, 20, 22
冬 山 穂高横尾尾根より槍ヶ岳縦走 CL.経3 倉 藤 孝 次 23	
5 月 後立山鹿島槍東面・新人強化合宿	32
ロック・クライミング	
奥又白の岩場三題	経4 越 田 和 男 37
前穂高四峯	経1 武 田 雄 三 41
剣岳ナシネ左稜線	文2 鶴 木 洋 42





次

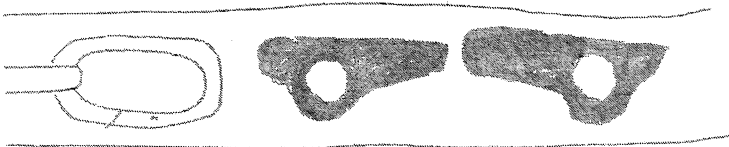
夏山 剎岳合宿 —日誌・岩登り—	高3	永島孝男	44
冬の 丸池スキー行	高3	乾 隆也	53
近郊 山行表	編	高橋山岳部	54
春山 乗鞍岳合宿	高3	永島孝男	55

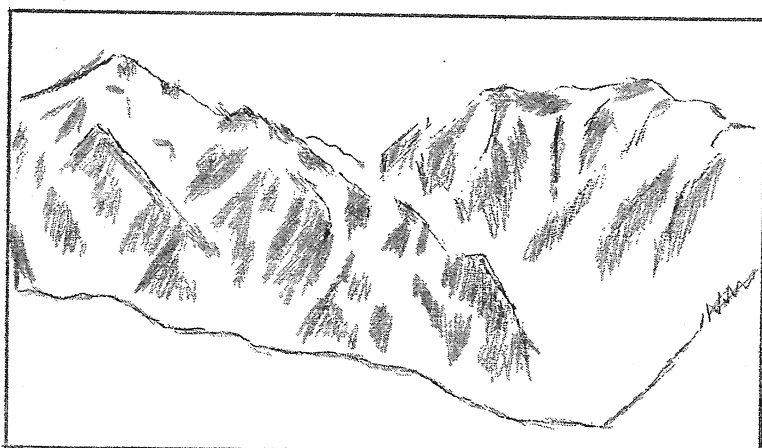
—研究—

立山東面の岩場	経3	大 岡 和 夫	62
	経2	飯 田 達	

—記録—

昭和36年度甲南大学山岳部合宿報告	68
甲南山岳会会計報告	82
会員名簿	83
部員名簿	86
編 纂 後 記	88





1961. 3
KONAN.UNIV.
ALPINE.CLUB.

SHAKUSHI
TOMEN
GASHIKU

HA KUBAYARI & SHAKUSHI

KAZU.

まえがき

昨年豊春山合宿に引続き再度、杓子、鍾東面を合宿の対象にとりあげた。出発前に、上級部員の参加が減り、本隊は3年1名、2年3名、1年5名というアンバランスな構成になってしまった。春山合宿については、一年の総仕上げとして、単なる訓練のための合宿ではなく、積極的な前衛的な山行をしたいと考えていたのではあったが、この計画に対してはO.B.会からも多くの御批判と御注意が与えられ、リーダー会としては、次の如く最終案を決定すると共に、セフティ・ファストの原則を再確認した。

1. 目的

杓子岳、双子尾根、樺平にBCを設け、杓子、白馬、鍾ヶ岳について可能なかぎり多くの方向から研究すること。

即ち、イ、杓子、鍾東面 *Variation Route* の登攀、研究。

ロ、部員の氷雪技術及び積雪期登山技術の向上。

ハ、杓子東面の気象及び杓子沢を中心に白馬三山の雪崩研究。

2. 対象

双子尾根より杓子岳、白馬岳、白馬鍾ヶ岳。

杓子岳東壁。

白馬鍾ヶ岳北稜

3. 参加

(本隊) C.L. 大関 和夫 (E3) 食糧 村上与利一 (B1)

L. 森本 全彦 (L2) 気象 武田 雄三 (E1)
 食糧 ニ谷 和成 (E2) 装備 有田 一郎 (JU)
 装備 鶴木 洋 (L2) 記録 橋田 信三 (S1)
 装備 長谷川 恵一 (B1)
 (中途参加) 大津 肇彦 (E3) 安井 正 (甲南高)
 (ボッカのみ) 伊藤 久三郎 (E4) 倉藤 孝次 (E3)
 岡田 英暉 (B2)

春山合宿行動表

場所 高度			神戸	細野	猿倉(BH)	小日向DP	B.C.	A	備 考
月	日				(1200m)	(1800m)	(2000m)		
3	8								先発隊3名出発
3	9			3					本隊10名出発
3	10	①		10	13				全員猿倉へボッカ往復
3	11	①			2	11			2名猿倉泊、 組はボッカ往復
3	12	○			2	1	10		大関、森本、カンバ平往復 フィックス工作 全員猿倉に集結 岡田下山
3	13	①			1	11			B.C.へボッカ。W.設置 伊藤下山
3	14	⊗			1	9			倉藤下山、有田細野往復、 也はラッセルに出る。
3	15	①				10			B.C.に集結
3	16	⊗			(沈没)				
3	17	①						10	全員双子尾根より杓子岳 フィックス工
3	18	○					6		強風のためコルへボッカ
3	19	⊗			3		(沈没)		
3	20	①			3	2	3	5	双子尾根より白馬岳 (ニ谷也) 白馬三山(森本他) 田辺、越田、大津入山

3	21	①		←	3	←4 ←3	杓子東壁 A尾根(大関他) 鱧北稜上半 (ニ谷他) 田辺、越田、安井下山
3	22	○			←10		コルヘボツカ
3	23	⊗		(沈没)			
3	24	○		(沈没)			
3	25	○			←1	←A.3 ←B.2 ←D.2	杓子東壁集中 A 尾根(ニ谷、大津、長谷川) B 尾根(赤本、樺木) D 尾根(大関、武田)
3	26	⊗		←1	(沈没)		大津下山
3	27	◎		(沈没)			
3	28	⊗			←9		撤収するも引返す。
3	29	○		←	9		撤収下山

春山合宿日誌

チーフリーダー 大関和夫

3月 8日

先発隊、倉藤、伊藤、岡田、大坂発。

3月 9日

本隊、大関他9名、大坂出発。高校部員や残留部員に見送られ、ちくま号にて出発する。

先発隊は、細野にて鉄道便で送った食料、装備を整理する。

3月 10日(晴のち曇)

本隊、先発隊細野にて合流。天気もよく猿倉まで第一回の荷上げを行う。雪もよくしまっており、荷も軽く快適なピッチで猿倉へ。帰りは、ダベリながら帰る。徳栄さん宅の夜は風呂に入りゆっくりと休む。

細野(9.40) — 二股(10.30) — 猿倉(12.20) (13.00)
— 細野(14.45)

3月 11日(晴)

猿倉へ第二回の荷上げを行う。昨日にもまして好天気。二股では不帰の峯をのぞき全員快調。輝く春陽の中、猿倉荘の前でジュースを飲みながら昼

食をとる。ノンキ氏はみごとなシューパールを残してスキーで下った後、皆が例によってガヤガヤと細野へ下りて行った。静かになった猿倉で雪の上にエヤーマットをひいて昼寝をする。大関、森本は猿倉泊りである。細野へ下りた連中は泣山のゲレンデに出かけスキーを楽しむ。

細野(8.30) 二股(9.20) 猿倉(11.20)(12.10) 細野(14.00)

3月12日(快晴)

大関、森本はB.C予定地カンバ平へのルート偵察に出る。ブナ林をぬけ猿倉台地に出ると、ものすごいデブリが続いているのには驚いた。長走沢の雪崩の大きさは予想以上のものだ。猿倉台地には標識の旗を立てながら進む。小日向コルにデポ用にする雪洞を作るが、雪に反射する陽光で、暑くてバテ気味であった。デポの雪洞に角スコを残し、テントのポールを持ってカンバ平へ向う。途中ニヶ所にフィックスザイルを張り、ボツカルートをつける。双子尾根はまだこのパーティも入っておらず、久方ぶりの杓子束壁も連日の好天気で黒い岩肌を多くみせていた。カンバ平の上に、ポールをデポして下山する。今日細野から上ってくるはずのボツカ隊が猿倉台地には仲々姿を見せず、どうしたのかと思いながら小日向コルへ。コルからのスキーもクラストした斜面ではあまり快適でなかった。猿倉台地末端にボツカ隊のデポがあった。小屋へ滑り下りると皆スキーをやっていた。台地のデブリを見てコルまでは来なかったようだ。猿倉には理科大が入って来ていた。

<偵察班>猿倉(8.15) コル(10.15)(12.45) カンバ平(14.20) コル(15.15) 猿倉(16.20)

<荷上げ班>細野(8.30) 猿倉(11.00)

3月13日

カンバ平へ出来るだけ多くの食料、装備を荷上げすることにする。共同装備は大体全部荷上げ出来る。スキーは持たずに行くことにする。よくしまった雪であり小日向のコルへの登りにもアイゼンを使う。コルの雪洞を少し大きくして食料をデポし、カンバ平へ。カンバ平ではワインパー型テントを張り、装備食料をデポして下る。今日のボツカによってこの一両日中にB.C集結の予定が立ったわけである。ノンキ氏はコルより下山。

猿倉(7.10) コル(9.10)(10.20) カンバ平(11.20)(12.50) 猿倉(14.50)

3月14日(雪)

倉藤下山。今日までがんばってくれた先発隊員はこれで全員細野へ下りた。

ボッカという縁の下の力持ち的仕事にがんばってくれた三君には感謝しよう。倉藤と一緒に有田を細野へ下りてもらい、お茶などの不足品を買ってきてもらう。沈澱していてもしかたないので午後猿倉台地までラッセルに出る。雪崩が起きている。視界悪く早々に引返す。

3月15日(雪のち晴)

天気図によると天気回復の見込。天気予報もそう伝えている。今日BCに入ることにする。猿倉より台地までは昨日のラッセルがあり割と楽であった。台地は標識の旗にぞってどんどんラッセルをかわりスピードで進む。小日向のコルへの取付の林でスキーをデポする。コルから上の尾根に出ると陽もさして来て晴天となる。カンバ平に入り、カマボコ型テントを立てブロックをつむ。今日からこのカンバ平で二週間にもわたる生活が始まるわけだ。

猿倉(7.00) 小日向コル(8.30) カンバ平(10.00)

3月16日(雪)

沈澱、朝のうちは風が強い。視界も悪く沈澱となる。ゆっくり休養することにするが、例のごとく、トバク場開帳。当たり当たりの一日となる。

3月17日(晴)

全員で杓子岳へ。

双子尾根を杓子東壁よりの下降ルートとして使用するため、フィックス工作を兼ねて杓子岳頂上へ全員で登る。テントからラッセルは始まる。長走沢上部の岩稜に30mをまずフィックスする。どんどんラッセルをかわって進むが雪は深い。杓子頂上直下は雪も堅く、一年生はアンザイレンして登る。杓子岳頂上では、剣岳に向って故郷永先輩に黙祷。帰途頂上直下の岩場10m。ジャンクション上の雪稜に30mフィックスする。杓子東壁、鐘、北稜等のルートを見ながら昼食をジャンクションでとりテントへ帰る。

BC(5.00) ジャンクション(8.20) 杓子岳頂上(9.00)(9.30)

BC(11.50)

3月18日(晴)

晴天であるが、ものすごい風である。アタックはあきらめ小日向のコルのデポに荷上げに森本他5名で行ってもらう。昨日くらいから僕は風邪をひいて一日中シラフに入ったままである。ところが昼すぎ強風のため、カマボコ型のポールを折られる。修理にかかるが痛烈であった。どうにかなおしたかテントの外はものすごい地吹雪となって来た。

BC(8.00) 小日向コル(8.25) BC(10.30)

(森本、二谷、武田、村上、有田、橋田)

3月19日(雪)

沈滞、僕の風邪は肺炎的症狀になって来た。なにか胸が圧迫されている感じだ。呼吸困難、出来るだけ薬品をうまく使ってじっと寝ている。明日か明後日には安井を下山させねばならない。高校生なので特に注意して下山させたい。森本にもし明日に僕が動けなかった時の行動をたのむ。

3月20日(曇のち晴)

① 双子尾根より白馬三山(L、森本、福田、有田)

② 双子尾根より白馬岳(L、二谷、鶴木、長谷川、武田、村上)(別記)

晴れたので上記の2つのアタックに出す。2年生をリーダーに猿立山の主稜線を歩いてもらう。少し僕も動けそうなので、安井を見送り猿倉まで下りるつもりで皆をアタックに出してから出発する。下は一面雲海が続き、ガスっている。小日向コルで横沢蝸牛山岳会の人と会い安井も一緒にさせて細野へ下りてもらうことにする。猿倉まで見送ろうとコルからスキーで下るがあまり滑らないので、スキーはデポして下る。猿倉台地で「オオゼキ」と呼ばれる。びっくりしているとガチャさん(田辺)コッシン(越田)大津がガスの中からあらわれる。安井を迎え方々合宿を見に来て下さったのである。そこで又樺平へ引返すことにして、小日向コルにデポしたウインパーNo. 3を背負子にくくりつけ、樺平へもどる。

アタックの途中も帰って来て、BCは三つのテントが張られにぎやかである。
樺平BC(8,00) 小日向コル(9,00) 猿倉台地(9,30) 樺平BC(10,00)

3月21日(晴)

① 杓子東壁A尾根(L、大関、森本、鶴木)

② 白馬鑓ヶ岳北稜上半部ルート(L、二谷、大津、長谷川、武田)(別記)

田辺、越田両先輩に「気をつけて行って来いよ」と見送られ樺平を出発。杓子東壁に登り切り樺平を見下ろすと、田辺、越田さんと安さんの3人が下山して行くのが見えた。樺平にもどると、テントの整備等で日あたりの良いテントの外で、皆たむろしてダベリ合う。

3月22日(快晴)

杓子東壁に3パーティアタックする予定であったが、目覚まし時計をかけまちがい、五時頃にやっと起きる。しまったと思ったが、それより、そろそろ長いテント生活で無責任な部員が出て来たのが残念だった。仕方なく、出来るだけ早く1パーティをA尾根にアタックに出すことにする(L、二谷、大津、長谷川)。3人分の朝食をいそいで作り送り出すが取付きを遅れたと

引返して来た。その好天氣に小日向コルへボツカへ行く。コルの食糧デポを整理するハ方尾根から不帰沢へ長いトレースが引かれているのが見えた。樺平にもどりカマボコ型テントの底に雪を入れ、テントを張りなおす。

樺平BC(8,00) 小日向コル(8,30-9,30) 樺平BC(10,30)
3月23日(吹雪)

沈澱、風強く吹雪となる。終日、ラジオを聴くだけ。

3月24日(快晴)

快晴であるが、杓子沢下降は危険なので沈澱する。テントの外に皆エアーマツトを持ち出し一日日なたばって過ごす。樺平に雪洞を作ったんばっていた、JRC Cの人達が徹収。残った食糧を持って来て下さる。大いに感謝して、久方振りのお頭付きの目ざしを食べる。夕方、杓子沢ヘラッセルへ出る。杓子沢は相当雪も深く東壁に向かってトラバースしてラッセルをつける。風強し。各パーティに分れ取付地点を確かめ引返す。明日はA、B、D尾根より東壁を登る予定。

樺平BC(15,40) 長走沢コル(16,20) 杓子沢(16,40) B
C(18,00)

3月25日(晴)

杓子東壁集ち

- ① A尾根(L.ニ谷、大津、長谷川)
- ② B尾根(L.藤本、鴨木)
- ③ D尾根(L.大関、武田) (別記)

以上の3つの尾根より杓子岳東壁を登る。各パーティ共雪の状態があまり良くなかったので登攀には割合時間がかかったようだ。杓子岳東壁にやっと僕達の足跡を残すことができた。3パーティ共ジャンクションの上で合流して下山する。双字尾根の下降はラッセルが深かった。一応の登攀目標は登り得てはとした気持ちになる。大津はこの日猿倉へ下山した。

3月26日(雪)

沈澱、晴れば再び杓子東壁へとも考えていたが、視界悪く雪もちらっている。今日は樺平に迎える最後の日曜日。神戸放送を苦勞して聴く。電話リクエストは山で聴くヒュ格別である。

3月27日(曇)

沈澱、視界悪し。BC徹収を考え、オ3フィックスザイルのみ徹収して持ち帰ることにする。藤本に徹収をたのむ。ノ年生を連れて行くように云っていたが一人で行ったと出かけた後で馳き武田と二人ですぐ後を追う。視界は

垂く20m位。フィックスを撤収。そろそろホームシックにかかる頃である。
3月28日(曇、地吹雪)

撤収するとこに決め、風が強かったがテントをたたむ。雪にうずもれたテントを苦勞して振り返し、樺平をあしにする。ところが双子尾根はすごいラッセルと風強く地吹雪となり、眼も明けておられず、呼吸もむずかしい。樺平より登ったところよりすぐ引返す。寒い中を再びテントを張り、ころがり込む。食糧もまだ二、三日あるので、天気を待つことにする。野菜、タバコがなくなり皆ゲツソリしている。

樺平BC(8.00) 引返し地点(9.00) BC再設置(11.00)

3月29日(快晴)

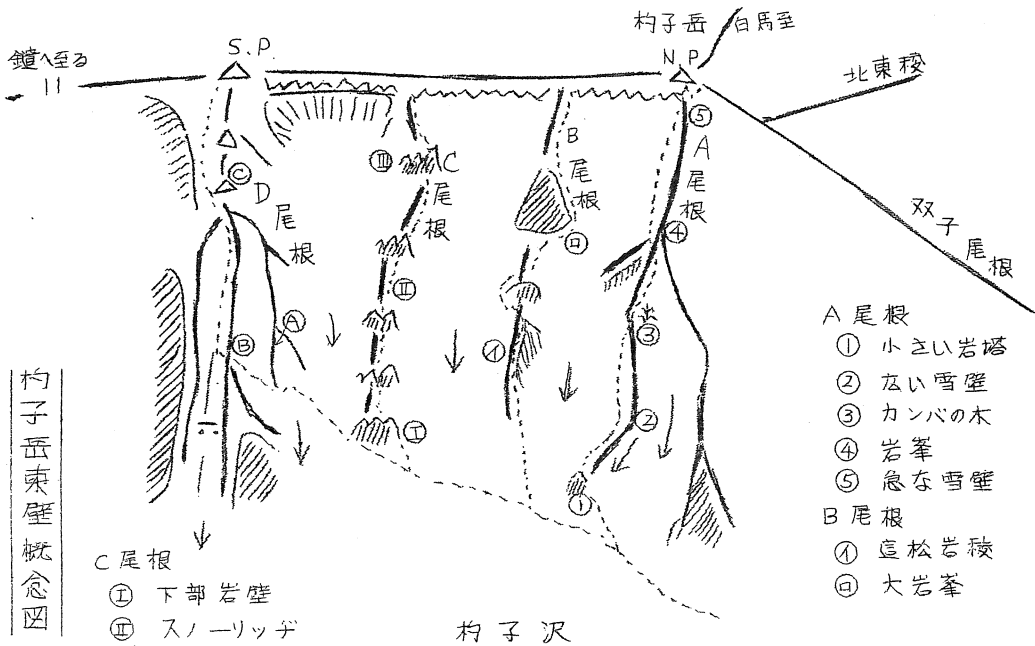
翌日の天気図からも29日(今日)が晴れなければ四日位、晴天は来ないだろうと予想していたら、幸にも上天気である。とにかく14日この雪の樺平にすぎたのだから、撤収も早いものだった。食糧はもちろん、ガソリンも残さず撤収力のあるところを見せんものとする。大分荷物もあり例のごとくファイファイとラッセルを続け小日向コルへ途中のフィックスザイルも撤収。小日向コルのデ氷のガソリンも撤収。スキーデポへ行く。スキーデポからのスキーでの滑降は大さわざであった。猿倉台地の熱いような太陽の光の中、大奮闘の末猿倉小屋へ。小屋で昼食スキーは宮林署の小屋まで伏えた。細野にもどり徳栄さん宅で一風呂浴びて、やっと氷の飯にありついた時は大感激であった。

樺平(8.00) 小日向コル(9.30) 猿倉(11.00-12.00)

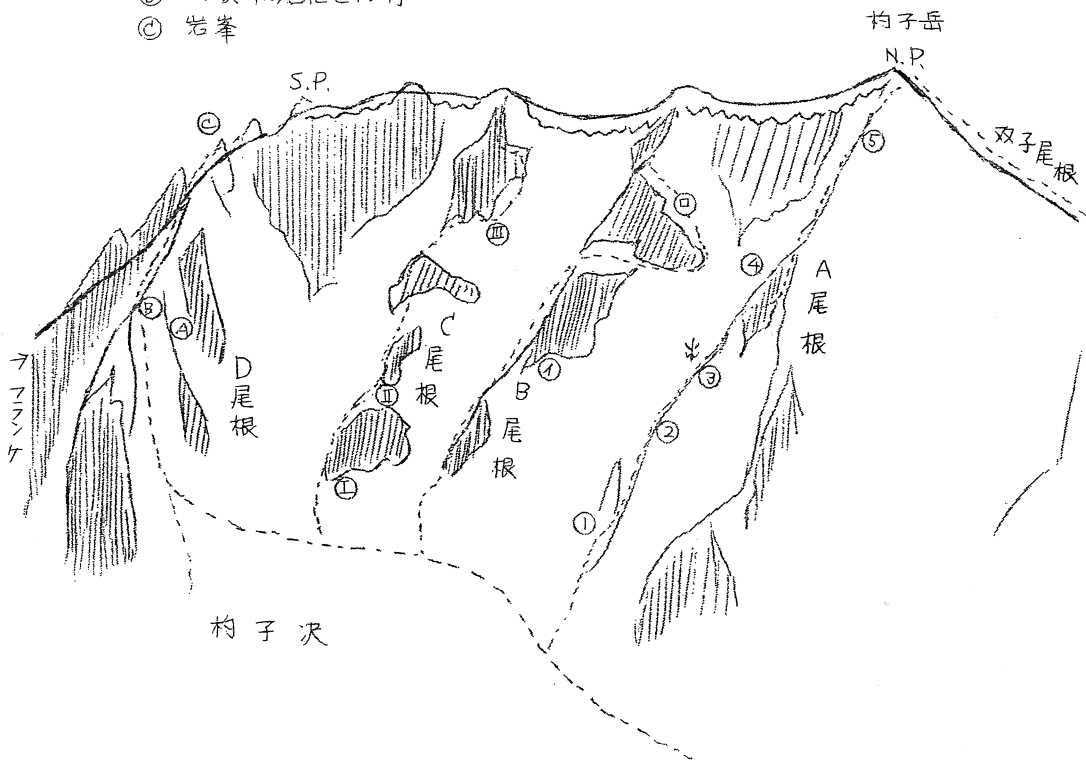
細野(14.00)

3月30日(晴)

徳栄さん宅から山谷駅までの田舎道を三々五々歩いて行く。杓子、鑊は要の中だった。荷物は鉄道便で送り出し、村役場に猿倉小屋の使用のお礼に行く。大糸線の車窓から後立山の白い峯々を満ちたりた気持ちでながめていた、麓はすっかり春であった。



— 甲南・大関和夫作図 —



白馬鎭岳北稜上半部ルート

長谷川 恵 一 (B1)

[Member] 二谷和成 (E2) 大津肇宏 (E3) 武田雄三 (E1) 長谷川恵一 (B1)

3月21日 (晴)

アタック食の餅をつめてみ少し休憩の後、杓子東壁A尾根パーティーと共にB,Cを出発。20分程かけてトラバース地点の興双子のコルに達する。杓子沢には前日のラッセルが点々と続いている。途中A尾根パーティーと別れて、D尾根支稜の威嚇的なフランケを横に見て、トラバースを続ける。雪はフィルムクラストしているので、ラッセルの切れた所から非常に歩きにくくなる。取付の急な広いルンゼは、早くも上半部に陽が当たってきた。全員でラッセルを炙わりながらキックステップでどんどん高度をかせぐ。ルンゼは最上部の15m程がぐんと右折して軍艦ピークの下コルに達している。ここで小休止の後2パーティーは別れてアンザイレンする。スタックトピーチで小さなピーク越えすると又5~6mの雪壁を持ったピークが現れる。このピーク小さいながらも雪底なんぞつけている。二谷氏のパーティーは、中央ルンゼ側を巻くが、僕達は、尾根通しに行くことにする。よろしとばかり襪の襷の木をビレイピンに大津氏トップで強引に乗り越す。次のコルを中央ルンゼに下る。中央ルンゼは陽を真正面に受けて、少々危い。コンティニアスで三角岩峰のコルをめがけて一気に登り切る。ここで小休止。振り返ればA尾根の3人パーティーがコンティニアスでジャンジャン登っている。何やら沢の解らぬことをかなりながら杓子沢側のルンゼをツルムめがけて登り出す。このルンゼは一日中陽が当たらないのかアイゼンのツアックが心良くひびく。20分程行くと頂上へ緩く緩斜面の雪稜に出る。ここでアンザイレンを解き、昼食のクラッカーをほおぼりながら、南稜、中央稜等のパノラマ写真を作る。春の日はヤッケを脱げとばかりに温かい陽を投げかける。体全体が雪といっしょに溶けていくような感じである。夏山では感じられない味である。A尾根パーティーも最後の雪壁に近づいたので、僕達も雪稜をいそぐ。20分も行くと白馬鎭岳の頂上へ出た。頂上で強風にたたかれていると、対面の剣の夏山生活が頭をかすめる。あの時はポーカで勝ったのに、それに比べてこの春山は、と剣の二股がうらめしくなってくる。その張本人が剣をバックに

フアインダーの中でふんぞり返っている。寒さに逼り立てられて白馬鑑の頂上を後に、杓子岳に向う。途中夏道をまちがえたりして少々時間をくう。杓子の尾根坂の登りは、すこしてたえる。杓子頂上でA尾根パーティーといっしょになり、皆で下り始める。今までクラストした稜線を歩いていたので雪の軟かさがしつように気になる。ピッケルでアイゼンのだんごをたたきながら橋本氏にA尾根の状態を聞く。ジャンクションの上で大休止、残りのクラッカーをかじりながら東壁をながめる。A尾根パーティーのラッセルが頂上直下の亜壁にあざやかに残っている。B尾根、D尾根の雪庇はちょうど上部で切れているが、C尾根は、ソフトクリームの様な雪庇が居すわっている。下へ目をやると、小人が住んでいるかの様にオレンジ色のテントが二つならんでいる。「そろそろ下りよか」とリーダーの声に遠くタバコを投げると、アタックの後いつも感じる満された様な感情が身体を駆けめぐった。

〔時間記録〕

杓子岳東壁A尾根

二谷和成

3月25日(晴)

(パーティ) L. 二谷和成(E2) 大津肇宏(E3) 長谷川恵一(B1)

朝メシを腹一杯つめ込んで、夜明け間近い薄暗い中をB尾根、D尾根のアタック・パーティと共に樺平のBCを出、奥双子岩を目指して登る。この急斜面はノビッチ目というせいもあって、相当てたえる。コルから右に東壁をおおぎ見ながら杓子沢へのトラバースをする。一つ大きな尾根を越したところで他パーティと別れ、A尾根末端目指して直登する。昨日取付近くまでラッセルをつけておいたとはいえ、ヒザを越すラッセルは大分つらい。上空は澄み切った青空であるが、遠くの方は雲がかかっているようだ。天気予報で天気は次第に悪化すると報じていたので何となく気がせかされる思いである。A尾根末端近くはあちこちにヒビが入っていて不安定であるので、少し登ったところでアンザイレンする。ここから45°位の雪壁がずっと続いている。この雪壁はわりあい雪がクラストしていてラッセルはないがグツと高感度がある。スリップでもしたらとまらないであろう。慎重を期してスタカットで進むことにする。二谷、長谷川、大津の順でキックステップで高度をかせぐが、ヒカンド長谷川はザイルさばきになれないのか少しもたっているよう

である。雪壁の上にある顕著な二本の樺の木まで30メートルアップでやっと雪稜に出る。前方の視界がひらけ、急に開放されたようであるが、この雪稜に出るとたん又末端までと同様ひざまでのラッセルとなり我々をうんざりさせる。となりのB尾根の森本、鶴木のパーティも同じ位のところを黙々と登っている。我々はここで大休止をすることにし、うまいものを腹につめ込む。丁度むこうをみると、カンロクが雪の中にうまってもがいているのが見える。B尾根は相当やばそうだが、ここからコンティニアスで、スタカットを交え進んで行くが、ヒザを没するラッセルで相当時間を食う。樺の木のところから30分位登ったところにシュルンドが口をあけている。そこをピッケル二本（トップだけ二本もってきていた）を使ってやっとの思いで乗り越すと頂上はもう間近にせまっている。ラッセルは頂上までなくなる様子もない。D尾根のパーティがどこかでコールをかけているのが聞える。まだずっと下の方であろうと思っていたのに頂上を抜いているのが見えたときには一同いささか驚いた。頂上真下の壁は急であるのと全然ウラストしておらず腰まで埋まるほどなので相当時間を食ったが、ダイレクトで頂上に出る。稜線は相変わらず風が強く、後の二人を待つ間にオーバースポーンと手袋がバリッと凍ってしまったのには閉口した。他パーティより早く頂上に出れるものと思っていたがラッセルが相当あったのと、三人パーティ（B尾根、D尾根は二人パーティ）ということから大分時間を食い、登攀を完了したときには他パーティはジャンクションあたりまで下っている。トソコはフィックス・ザイルを使ってどんどん下る。フィックスの有難さが身にしむようだ。ジャンクションのところで残りのうまいものを食って杓子東壁をふり返り仰ぎみながらテントに降る。

BC (5,00) — コル (5,20) — 末端 (6,00) — 樺の木上 (7,55 ~ 8,10) — シュルンド (8,40) — 頂上 (10,40) —
BC (11,40)

杓子東壁B尾根

文2 鶴木 洋

3月25日 (L. 森本全彦 (J2)、鶴木洋 (L2))

杓子沢は、昨日ラッセルを付けたので劉合衆に歩ける。A、D尾根パーティーと別かれると、すぐにたいがらラッセルがあるが、森本と二人で、変わる

変わる。このB尾根取付きはC尾根と間違え易く、手前の長く突き出ている方がC尾根で、奥の方がB尾根である。この取付きから1ピッチほどの所に、小さなブッシュがあるが、この下の所の雪がすこし割れている。見るとA尾根のパーティーは、三人なので少々もたついていて時間を喰っている。取付き附近の3ピッチ程、ローザイルで登り、そこから休みかたがたアンザイレンする。すこし登るとB尾根に3つの雪の付いてい寒い岩峰があるが、その最初の小さな岩峰に出る。この岩峰は、C尾根側に切れていて、普通こちらの方を捲いているが、稜線通しに登ることとする。右斜めに小さな樺の木が生えていて、それにそって15m、そこから左に出る。この附近は雪が不安定なので、なるべく下のハイ松をたよりにする。

上に出ると傾斜は急になるが、稜線はたいしたナイフリッジにもなっていないので気が楽だ。

D尾根のパーティーも取付きのルンゼでだいぶしぼられていそう。次に2つ目の岩峰に出喰わす。この岩峰も雪から岩に移るところが悪く、ここでピトンを打ってみるが、岩がもろくボロボロ落ちる始末なので、あきらめてハイマツをホールドに挟って強引に乗り越す。この岩峰で手ごたえが少なくて30分かった。ここからは不安定なナイフリッジで三角岩峰の下に達する。

この三角岩峰は、40mそこそこのもので、岩は逆層でもろく、これだけは二人ともあきらめてA尾根側を捲く。A尾根の連中はノンビリとして休んでいる。話し声はまる聞こえ。

ここで森本がトップに出る。5m程出た時小さな彼は穴にスッポリと落ち込んで、この時だけはビツクリした。20m出ると自分が40mいっばいにトラバースして捲き終る。そこから三角岩峰の上に出ているルンゼを2ピッチ上って稜線に戻る。

この調子で行くと頂上へ一番乗りが出来ると張り切っていたとき、D尾根パーティーの音がする。頂上を見ると奴等、もうローザイルを捲き終えて、スタコラと帰って行く。

このショックでピッチをゆるめて、ゆっくり行くことにする。

三角岩峰の上から2ピッチ程、コンティニアスで進む最後の雪壁にとりかかる。このB尾根の上部の雪ピもたいしたことない。2ピッチ登り頂上直下に出ると風が強く、遠慮なくすきまというすきまに雪が入ってくる。ピッケルとアイスパイルを挟んでガムシヤラに頂上に出る。風は強いが視界は良いので剣・毛勝三山が目の前だ。森本に声をかけて二人そろって早速に降りじたくしてさっさと双子尾根に降りる。

ジャンクションの上で、D尾根の連中と落ち合って“旨い物”を喰らいながらA尾根パーティーの登攀ぶりを『たかみの見物?』とシヤレてむ。A尾根の奴等が、全員頂上に出てから腰を上げて、スタスタと引き上げる。主稜線に比らると双子尾根は暖かく気がゆるむ。

時間記録、樺平B.C. (5時15分) — B尾根取付き (5時50分) — 三角岩峯 (8時30分) — 杓子頂上 (10時10分) — 樺平B.C. (11時5分)

(装備として二人パーティー ピッケル3本、アイスパイル1本、ザイル (芦森ナイロン) 40m 一本を使用しました)

杓子岳D尾根

経3 大関和夫

3月25日

(L. 大関和夫 (E3)、武田雄三 (E1))

杓子沢は昨日の夕方につけたラッセルが広い斜面にミシンの目の様につづいていた。凍りついた急斜面を、皆無言で取付きに向う。A、B尾根パーティーに別れ、お互いに「がんばろうぜ」とはげまし合う。D尾根へはなおもトラバースをつづける。斜面はますます急になり、アンザイレンをすることにする。ラビーネソックにそって登る。ほとんど氷の壁をアイスパイルでステップを切りながら進むと、雪質は変化して毛むく様になって来た。パイルとピッケルを持つ僕とピッケル2本を使う武田と交互にトップを入れかわり、ピッチをかせぐ。杓子沢に陽があたり、中央稜の滝状の氷壁から、ザアーとチリ雪崩が落ち始めて来た。上部に見えるコル目がけて登る。下をみるとほとんど垂直の岩壁でビレーをしていると足が冷たく、しびれて来た。

コルへの登りは急になり又氷の斜面の上に15cm位うすく雪がつき、不安定な雪の状態である。最後、ワンピッチは、ロックハーケンを一本、ビレー用にきかせて、パイルでステップをきって登り切る。コルは大きな雪庇をはり出しているので、ナイフリッジを選び、ビレーをする。武田が登って来るまでやっと落ちついて、杓子東壁をながめる。A、B尾根にコールをかける。ほとんど上部にまで彼等は登っている。少し休むこととする。ここに登るまで30mで実に20ピッチもかかった。雪の状態によってはむずかしい壁となる。コルより上は深いラッセルになやまされながら、コンティニア

スで進む。D尾根は地形が複雑であり、ルートとしては色々取れる所である。ルンゼ状の広い斜面を胸までのラッセルで、遅々として進まず、上部に雪をまばしている尾根へ出ることにする。稜線は風が強く、雪もかたかった。もう一段上に壁状に見えるのが後立山の主稜線である。

コンティニアスでピッチを上げ、岩と木のミックスした細いルンゼをつめると、風が一番と強くなる。最後の壁はブルーアイズで、スタックカットで登る。バイルをおもい切り、たたき込んでピンとして、身体をもち上げると黒部からの強い風が顔を打ち、かなたに剣の姿があった。「ヨッシャ、いいや」のかけ声で武田も登って来て、例の登攀の後のハシャギ方である。ザイルをまいて、杓子頂上への稜線を歩む。途中、岩の上に登ってA、B尾根にコールをかける。彼らは意外に遅くまで相当に下を登っていた。杓子岳頂上から下降ルートである双子尾根をフィックスザイルを使いかけ下る。A尾根がすぐ真近かに見える広い斜面でザックをおろして、A、B尾根へパーティに何んだかんだと呼んだ。B尾根は最後の壁を乗り越えるところであった。B尾根パーティが稜線に消える。やつと少し落ちついてと、アタック食を出す。B尾根のパーティも下って来て、一緒にA尾根パーティの登攀を見守る。A尾根の二谷が頂上へダイレクトに登り切るのを見届けて、下山にかかる。双子尾根は風もあまりなく、のんびりと雪をけちらせながらジャンクション・ピークから権平へと下って行った。

(時間記録) 権平BC(5.00) D尾根取付(6.00) D尾根主稜コ
ル(8.20) 杓子岳主稜線(9.20) 杓子岳頂上(9.30) BC(
10.30)

(装備) 2名、ピッケル3本、アイスバイル1本、ザイル(芦森ナイロン
30m)1本、ロックハーケン使用1本。

春山食糧反省

二谷和成

山の食糧に必要とされる

1. 軽量
2. 調理簡便
3. 長期保存可能
4. カロリー大
5. 嗜好に合う

の全部の条件を満たすとは難しい。

そこで今回は特に1、軽量化に重点をおいて食糧計画を立てた。まず問題となるのは、例年通り主食に餅を用うることです。これは1から云えば、もう無条件にまっ殺されてよいものであるが、今まで持続されてきたのは、5、嗜好に合う点、すなわち日本人が米を主食としてきた以上（もし日本人でも米を主食としない人がいるとすれば、その人は別だが）米に類するものが食べたいという嗜好ということに今まで軽量化ということに余りにも犠牲を払いすぎていたからであります。そこで、この嗜好という点を出来るだけおさえて軽量化に力を入れて、しかも食べていてあまりいやにならないようにする、おいしくすることである。そこで今回は餅をテント生活/5日間のうち3食（すなわち5日に一度）だけにしてしかもそれはアタックを行う朝としました。他の主食は朝、パン、昼、乾パン又はクラッカー、晩、ソバとし、主食よりも副食をよくして、おいしくて食べ易くしかもカロリー大であるものにしたいたいと思い、パン、乾パン等の副食は従来より少しよくする程度にとどめさし当って特にソバに力を入れてみました。というのは、餅にとって変わるものはやはりソバではないかと考えたからであります。なお調味料は、昨秋あたりから用いているスープの素（コンソメ）を用いることとあります。これはしょう油よりずっと軽量化ですし、運搬に便利で、しかも万人向きの味がつく自信をもっております。このスープの素は今回もわりあい好評でしたが、まだしょう油を入れなければソバの味ではないという考え方をもちている人があるようですが、改める必要があると思います。

次に肉類と野菜ですが、肉類はベーコンに限ります。ソーセージやハムに比べ軽くしかもカロリー大ですから、少々高くついても持って行く必要があります。又野菜については今回は玉ねぎ、キャベツ、白菜といったものを極力減らし、ホウレン草、エンドウ豆をもって行ったことは、軽量化において成功であった。又、ホウレン草は今回は生のまま持って行きましたが、凍るだけで差支えありませんでしたし、最後まで野菜は切れずにすみしました。これも出来れば乾燥野菜にして軽量化をはかるべきであります。今回の合宿においては、主食と野菜を主として軽量化をはかったのでありますが、これから先、いろいろ改善していく必要があります。

——春山装備——

森 本 全 彦

共同装備一覽表

品 名	数量	重量	備 考	品 名	数量	重量	備 考
ウインパー	4~5人	10 kg		ガソリン	35ℓ		
〃	3~4人	8 kg	小日向コルデボ	ポリタン			
カマボコ	7~8人	15		ジョーゴ	3		
エ ン ビ	大 2	4		洗面器	4		ナベの代用
	小 1	0.5		食 器	大 13		
ノコギリ	2	1			小 13		
ナ タ	1	0.5		庖 丁	2		
ツエルト	2	1	ナイロン	お 玉	2		
ローソク	8	1.5	50 枚	茶 コシ	1		
アイスバイル	2	1.2		サ サ ラ	10		
ハンマー	2	0.5	ロックハンマー	マ ナ 板	2		
カラビナ	10	1.5		ラ ジ オ	2	1.2	電池予備共
ハーケン				寒 暖 計	2		
(アイス)	6	0.6		天 気 図	30		
(ロック)	大 15 小 15	1.8		細 引	30 m		
ザイル				赤 旗	70 枚		
ナイロン	4 mm	10	{ 苧 12mm×2 束 網 11mm×2	竹 ザ オ	60 本		
フィックス用 (麻)				工 作 用 具	一式		{ ペンチ、ビス ドライバー 針金
ロープ	50 m	2	8 mm	中性洗剤	1		
ザイル	2	6	{ 12mm/40m 11mm/30m	テ ン ト			
捨 て 網	10 m			エアーマツト			
シヨイコ	2	3 kg		修理用具			
スピッツェ	2	0.4		薬品一式			
ホエーブス	3	3.9	ヤットコ付				

〈反省〉

合宿なかばにして、カマボコのバンパーが折れたり、色々装備に支障を来しながら、どうにか無事合宿を終えましたことは、部員一同の協力によってかちえたものでしょう。

試験終了後のあのあわただしい装備の点検、買い出し、出発時迄、何か大切な物をめすっているのです、この不安な気持ちを招き汽車に乗りてしまいましたが、合宿中でそんなにたいした暇も出さず、なによりだったと、安堵がおそって来ます。次に、装備一覧表を追って、思いついた点を述べて見たいと思います。

〈テント〉 幸いにして今合宿中は雨が降らなかったようだが、雨が降った場合の用意をして行くべきであった。ウインパーでは、雨漏りするのとは必至である。このテントは明るくて居住性は最良である、カマボコは非常なる不幸な目に会った、揮平に吹きおろす強風によって、ブロックが吹っ飛び、それがあたって、バンパーがポツキリと折れてしまう結果となる。一時は、サテどうすべきかとまよったが、どうにか修理をする事が出来、なによりであった、内張りを洗う必要がある。そうすればもう少し明るくなると思うか。

〈エンピ〉 もう少し軽くないものだろうか。

〈ツェルト〉 積雪期に適した物を考案すべきと思います。

〈アイスボイル〉 誰れもが言う「非常に便利」と、

〈ザイル〉 ナイロンノスれは思ったよりも軽くならなかった。11mmで良いのではなかろうか。

〈ホエーブス〉 /台故障をきたすが、これは出発前の点検をおてたせいで反省しています。又、修理を出来るよう勉強すべきである。

〈ガソリン〉 ガソリンの入れ物を考えるべきだ、漏らないように。

〈綱引〉 余分に持って行く事。

〈中性洗剤〉 非常に便利である。



我が山岳部に於ては、装備の使用が非常にあらっぽく思います。いなんだから、失ったらお金で片がつくと考えている人が多い。これは、絶対に改めてほしい。共同という社会を忘れないで、行動していただきたく思います。共同装備は、各人の趣人と考えていただきたい。兼品について一言。合宿を行つたびに、カゼをひく者が必ずといっていいぐらい出る。これは、

常の健康管理が悪いのだと思います。また、カセ薬は、個人整備として、各人がすべて持って来ていた方がいいと思います。科学的、合理的登山をめざすため、平生の地味な努力を全部員に望みます。

あとがき

CL 経3 大関 和夫

計画前、山行後に問題となった点について最後に書いてみたい。

(1) まず、登攀対象としての杓子東壁についてであるが、一部先輩の間では一年生のバリエーションルート登攀について疑問だという声もあった。僕自身としても杓子東壁を一年生で登り得るかどうか、いささかの疑問があった事は否定できない。過去この杓子東壁に登攀したパーティについて多くの資料から見ても、秀れたパーティのみがこの東壁に登っているのである。僕自身がまずこの杓子東壁に登り、自分でこのルートを評価し、その後一年生については登攀させることの他、自分としては最良の法はなかった。一年生にバリエーションルートを云っても、この一年候補は部員の持てる力は充分発揮できるような山行を行いたいと希み、努力して来た。その結果、わずかに一年間であったが、一年生にも、剣、穂高などの岩場も登る機会があったし、トレーニングは積んでいた。残された問題は登攀技術の未熟でなく、なんといっても一年生という経験の不足とそれに伴う、登攀パーティのリーダーの問題であった。3年は1名というこの本隊では2年生をリーダーとして動いてもらう他なかった。春山合宿の前期には2年生をリーダーに双子尾根より白馬三山へパーティを出し、2年生にリーダーシップを学んでもらう方法をとった。夏、秋には2年生リーダーの分散パーティがあったが、積雪期では初めての試みであった。僕としては、下級生といっても充分の訓練と研究を積んだ部員であれば立派に積雪期でも分散行動がとれると確信している。

(2) 部というものに対する考え方について、山岳部にあっては、これの一つの組織体とみると、締めすぎると萎縮し緩めすぎると統制がとれなくなるという一般的な政治性の常識の枠を出ないということを、今一度部員全員で考えてみる必要がある。

(3) 山岳部は運動部の中にあっても、最もチームワークという点で強く固まっていなければならない。僕はトップダウンな部のあり方でなく、いつもボトムアップな部をと希んで来た。それ故、部員の一人一人が、仲間の

信頼を裏切るようなことのない様、技術的にも精神的にも成長したい。

(4) 装備、食糧については、不備な点もみられたが、ここ数年で甲南の装備、食糧は年々改良され、一応現在希める最高の線に近いものが得られたと思う。特に食糧については、栄養、軽量化はほぼ満足の出来る線を出すことができた。装備についても今後、無線機その他有効な装備に対する研究を進めてほしい。

(5) アカデミックな登山を求めているながら、最近科学的研究がないがしろにされ、登攀第一になって来た点もあることは反省しなければならない。

(6) 部の指導方針についても、生活技術を身につけてから、はじめて岩や雪にとりつくような訓練を望ましいことである。

(7) 今回の春山合宿で白馬三山東面についての概念を未完成ながら把握できたと思う。岳人 / 55号に発表した杓子東壁の原稿に加え、本年六月発刊の現代登山全集、第四巻「白馬、不帰、鹿島槍」創元社版に白馬三山のバリエーション・ルートとして一つの研究結果として発表した。

1960年12月

穂高横尾尾根より槍ヶ岳 縦走

・経3・倉藤孝次



KAZU.

＝ 厳冬期合宿 ＝

< 1960. 12. 17 ~ 12. 29 >

計画 厳冬期に於ける横尾尾根より槍ヶ岳縦走及び槍ヶ岳登頂。

期間 12月17日 ~ 12月29日

member C.L. 倉藤 孝次 (E3) S.L. 越田 和男 (S4)
S.L. 広瀬 健三 (E4) S.L. 藤安 賢二 (E4)
森本 全彦 (J2) 以上縦走隊。

C.L. 大関 和夫 (E3)

S.L. 二谷 和成 (E2)

村上与利一 (B1)

長谷川恵一 (B1)

有田 一郎 (J1)

上田 兼 (B1)

以上 サポート隊

A. 計画概要

今回の合宿を決定する迄にリーダー会に於て種々の計画が組まれた。例えば白馬主稜、西穂から奥穂高登頂等を全員でもってボーラを行う-----しかし残念下ら新入部員の積雪期に用するテクニックの未熟の爲、これらの合宿計画を放棄せねばならなかった。

結局中級部以上の精鋭主義による冬期の縦走を試み、他部員は寒鞍にて積雪期技術の習得と云う結論が出た。続いて目的地であるが、まずオ一に部員の中で冬期の縦走の経験者がいない為、なるべく近距離の所、オ二に独力で行動し得る所と云う二つの条件の基に選択されたのが横尾々根より槍ヶ岳を経て再び横尾に帰る(下降路は槍沢)と云う事になった。又より安全性と縦走隊のアルバイトを少くする爲にC1建設迄6名のサポート隊を必要とした。

横尾々根偵察は秋期合宿の時、現地偵察を行った結果、途中横尾々根より派生する(本谷側へ)横尾根から取付きP5にC1を設ける事が考えられたが、あまりにもアプローチが短い為、取付き地点を下にする事にする。即ち横尾々根より梓川に落ちている通称スのガリーなるものを登路とする。この際スのガリー上部(コル直下60m)は草付きの上、傾斜が担当あるので、雪崩の危険性が大きいにあるが、早朝の通過は可能であろう。尚下部は傾斜もなく、大きな石のガラ場であるため、本流は心配なく、たゞ両サイドの雪崩に注意するに止まったが、合宿中のオ一の難所とする。P4にC1を設けP8にC2、南岳と中岳の中間にC3を設け、最終キャンプは慈恵医大小屋使用と決める。オ二の難所とするP4の登り、横尾の歯の通過、中岳の下りはフィックス工作によって、容易に通過出来るであろう。次に下降ルートは槍沢であるが本流の雪は最も悪いコンディション以外は通過は容易と見、たゞサイドよりの雪崩に注意を要する。尚槍沢上部出来る限りの所迄スキーを持ち上げスキー使用を考慮に入れた。

前述した様に縦走隊のアルバイトを少しでも軽減する為に装備、食料については、あらゆる角度から検討された。

12月18日(日)◎◎

松本より島々へ、島々で兼鞍の先登隊と分れ縦走隊5名、サポート隊6名、計11名、バスにて沢度に向う。例年より雪が少なく、梓川にそったバス道路は黒い土が見えている。沢度にてトラックをチャーターする、中ノ湯迄車を入れてもらう。この介だと今日中に横尾迄行けそうである。鎌トンライトを付けて通過。大正池は寒々とし、数々の木々が水面に立っている様は全く不気味である。上高地の木村氏宅にてDepot 荷物を加え、各自40 Kg位になる。「徳沢よりの眺めはエ、デー」と云う先輩の言葉を思い出すが、今日は視界0に等しい、残念である。徳沢で積雪30 cm、少々風が出て来る。その上雪迄降って来る。時計を見ると15時、荷尾迄一気にのしてしまふ。冬の日早く落ち横尾に着いた頃には日はとっぶり暮れていた。山荘内は人子一人も居なく静かであったが、一気に快気ずく。

島々(8:40)→沢度(9:25)—中ノ湯(10:00)—上高地(12:00)—徳沢(15:15)—横尾(17:30)

12月19日(月)①①

6時起床 8:00時出発 少々遅れたが各自34 Kgの荷物で2のガリーへ向う。越田、藤安の2名は槍沢偵察とスキーDepotを兼ねて出発。

9時2のガリー入口。気温-20℃。ラッセル膝位。一気に登りつめる。丁度3/4位の所で朝日を背に受ける状態になってしまった。一たん、ちよつとした尾根上に出て小休止。雪の量が少い筈雪崩の危険は少なかったが、十分休息を取り、最後の急斜面を一息に登り切る。コルで昼食を取る。コルより上は積雪が少いのと傾斜が急なので、荷物を持つての登攀は無理と考え、一時的なフィックスを張り、アイゼンで登りつめる。しかし我々の考えには及ばなかった所が次に出て来る。あわてゝテント場の偵察に出かける。P4のすぐ下の平池をテントサイドとして、P4の下迄ダブルボツカをする。荷上後すぐサポート隊は横尾に帰らす。これから先自力で槍ヶ岳を経て横尾に帰らねばならないと思うと、ガゼンファイトが出て来る。

今夜は広瀬、森本、倉藤の三人でじり留り、穂高の稜線、淵沢、遠くに槍ヶ岳のピークが夕日に輝き美しい。夕食にソバを食ってシユラフにもぐり込む。昨日と云い今日と云い相当のアルバイトであった。

横尾山荘(8:00)→ルンゼ入口(9:00)—12:00(マル)

16時(テントサイド—P4下),

12月20(火) ⊙ ⊗ -10°C 7時現在

5時起床、簡単な朝食を取り、昨日サポート隊が上げた食糧と若干の装備を持ってC2予定地に向う。ラッセルは膝位、P4の最後の登りにフィックスの必要があったがブッシュを掴み強引に衆越す。今迄ずっと林間のラッセルを強いられしたが、P5前からハイマツ帯に戻りやうと嫌なラッセルから解放される。これより槍沢側へのつい落をさける為赤旗を数本目標に立てる。

P5を越えると日大のB.C.がある。C2設置目的地はP8であったが、少し時間を費さねばならぬので、横尾の歯の手前にC2を設ける事とする。P5の山稜に二人の姿が表われる。越田、藤安の西人である事は一目で解る。

彼等に雪洞掘りをたのみ、我々三人は歯の偵察と荷物の Depot を兼ねて前進する。歯に約40Kg. を Depot しC2に帰り雪洞で昼食を食う。こゝまで来ると北穂、北尾根が手に取る様にハッキリと目前にぞびえている。偵察の結果、日本の fix がある為それを使用して載く。今日は5人そろってC1に帰る。

7:10 (テントC1) — 8:00 (P4) — 10:30 (P5)
11:15 ~ 12:00 (昼食) 12:00 (C2) — 13:45 (D.P.)
~ 14:00 15:05 (C2) — 15:55 (C1)

12月21日(水)

5時起床、常食のパンとスープを食い、さっそくテントを撤収する。各自約35Kg.の荷物になる。何回通っても林間内のラッセルは楽しくない。又旗ざおやエンピが邪魔になって困る。林間を越えるとぼっとする。昨日のラッセルの跡が薄く残っている。

槍沢側に立てた赤旗がガスの切れ間に風になびいている。11時30分テント予定地に着く。テントサイドは稜線より槍沢側に下った。くぼみにウインパーを張る事にする。昨日掘った雪洞内で昼食を取る。風が時々音を立てて本谷側より吹き上げて来る。今日の北穂はガスにすっぽり包まれている。

昼食後各自 Depot 荷物を持ち出かける。突風が起り歯の衆越しには相当骨が折れた。日大のフィックスを使用させてもらう。歯自身3つのピークから成り真中のPの下りは仲々やばい。Fix の全長45m。P8に約40Kg.の荷物を Depot し引き帰す。テントを設置し一夜の宿とする。ガスがどんどん吹き上げ、天気は荒れて来る。この分だと明日動けるかどうか心配である。何回もテントから出て空を見るが星一つ見えない。

12月22日(水)

ちょっと寝すずし、あわてゝ朝食を取り、テントをだむ。今日も昨日と同様雪は降らず風のみが吹いている。あい変わらず視界は0に近い。8時40分C2出発。歯に9時丁度、歯の寒感しは昨日よりも重い荷物なので慎重には慎重を期すが、突風の為、吹き飛ばされそうになる者が現われ胆を冷すがどうにか乗り越す。相当時間を使った、天狗の池で小休止。駒田・森本は最後の急斜面を登り、主稜線のテントサイドに向う。他の者は昨日のデポ荷物を取りに帰る。いやに風が強い。デポ地点で昼食を取る。後デポ荷物を持ち一気に主稜線に上る。この急斜面に二ヶ所日大のfixがある。思わぬ所で他校のfixを使用させてもらう。テントサイドに荷物を置き又下る。14時40分C3に人間様と合宿中の荷物全部集結。あとは槍筈一息。主稜線上はガスが飛び5米先が見えない。アイゼンは快的にきく。この上天気さえ良ければ申し分ないのだが……今日も良く動いた。人間はなんと、がんばりように出て来ているかと云う事が良く解る。夕食に熱いソバに胡塩を一杯かけフウフウ云いながら食う。シラフに入り静かになると、山鳴りがする。

12月23日(金) 天①〇

6時に起きるが、外は猛烈なる吹雪である。この分だと中岳の下りが相当やばく思われ、今日一日ゆっくり沈澱と決め、再びシュラフにもぐり込む。10時頃誰とはなしに空腹を訴えるので朝食にする。テント内がいやに明るく又風もおさまった様である。外に出るとまばゆい位の天気である。北穂の薄谷、槍ヶ岳、笠ヶ岳がくっきりと朝日に照らされ、美しい山登りの快感ここに味う。今迄の苦労が一過に吹き飛び、寒さも忘れ、あたりの景色に一時目とれる。衆議一決。これから槍筈 Desuo の荷物を持って行こうと云う事になる。あわてゝ朝食を取る。

中岳の登路は右側を取る。本来は左稜線を行く。吹きだまりの脇膝位置のラッセルを強いられる。中岳の下りに30mナイロンザイルをfixし通過する。快的にツアックがさる。日は照っているが稜線の風は顔(がヲ)に雪をたき付けて痛い。ベルグラが美しい。槍の角に到着。小屋内は雪が吹き込み寒々としているが、我々には取っては、立派な御殿である。

槍の雄姿は我々の4ヨウ戦を受けんが如くに、この突風にも負けず突立っている。帰る頃には風もやみ、全くの快晴。遠く東嶽を望み仲間の事を思う。自然とネブカブシが出て来る。〈本日の日記より〉

快晴の3000m稜線。白と青のコントラストの取れた色彩。如何なる画

家でも書き示す事の出来ぬ景色である、全く美しい。この一語につぎる。本当の山行きの感こゝにありと云った調子である。以下略

C3 (12:15) — 中岳 (12:55 ~ 13:20) — 肩ノ小屋 (14:35 ~ 15:00) — C3 (16:05)

12月24日(土) ⊙ 吹雪

6時起床。昨日の快晴に比べ今日は嵐の前の静けさと云った天気、黒雲が日出しの方面より蝶ヶ岳の方へ、槍の様に飛んで行く。全く不気味である。午後からは相当荒れそうである。テント撤収後、あわてゝ肩ノ小屋へ向う。中岳の登路は左稜線を取る。FAL ザイルを撤収し、大喰岳へ、風邪を引き息が切れて、フウフウ云いながらラストから着いて行く。昨日の元気どこへやらである…… それでも2時間で肩ノ小屋に着く。天気が荒れる迄に槍岳登頂を終ろうと、軽い食事をして、アタックに出る。倉藤は風邪の焔小屋で沈。このアタック隊も1時間半程で小屋に帰って来る。あとは槍沢を下り一気に横尾迄帰る予定。久方振りにのんびりと休息する。尚アタック記録は別紙にて詳細に……

C3 (8:00) — 8:55 (中岳) — 9:45 (肩ノ小屋)

10:30 (肩ノ小屋) → 槍ヶ岳頂上 (11:30) — 小屋 (12:00)

12月25日(日) 吹雪

風雪強く下山を見合せ、小屋にて沈黙とする。ゆっくり起き、食料その他の点検を行うと、まだまだ居座れそうである。それにしても、大きな小屋に五人、寒くて仕方がない。すき間風が心にくい程吹き込む。外は相変わらず吹きまわっている。午後よりラジオのミュージックを楽しむ。ジンジロゲが大流行。

12月26日(月) 吹雪

今日も昨日と同様風雪強く下山中止。二日も沈黙が続くと、大きい小屋とは云え、する事はなく、たい食っては寝、の連続である。これにもあきると下界のメツチェンの話になり、だんだん話が落ちて来る。下山が長びいても食料が十分あるので皆落着いたものである。朝からベーコンをジュンジュンいわして食っている。食うだけが楽しみである。

12月27日 雪後曇

吹雪もやみ、雪が降っているだけ、積雪はあまりなく、この分だと槍沢の雪崩の心配もまずないので、下山する事に決める。撤収の荷物は相当ある。コルより200m下迄アイゼンで下降し、あとはワッパと併用する。1時間半程でスキーデポの所に着く。上ではそんなになかった積雪もここでは腰位迄もぐる。しかし雪質は昨夜の低い気温の爲、相当しまっている。スキーを付けて少しの間は快的に滑ったが、夏道からはずれると、スキーを付けて滑るのがいやになる位転ぶ。どうやら下降ルートを誤り本流を滑っているらしい。大きな岩が雪をかぶりボコボコしていて時間を食う。槍沢小屋にて大休止。これから下でも又ルートを誤り、偵察の軽はずみの御かげで二ノ俣に着いた頃には日はとっぴりと暮れていた。ここ迄来ると雪崩の心配も100%なく、河原に再びテントを張り一泊する事にする。上から持寄って来たソバを食い、濡れた衣類を乾し、シラフにもぐり込む。今日のテント内は暖かい。まだ雪が降り続いており、清流の音もかろやかに聞える。時々山鳴りがする。

12月28日(水)雪

雪の中を撤収にかゝる。相変わらず今日もスキーで下山、ラッセル腰位。昨日より荷物が重くなった様である。二ノ俣を経て横尾に向うが、道のりの長い事。頭に来る。スキーは滑らず、たぐかいているのみ。出発后3時間位で横尾に着く。ここ迄来ると町に帰った様である。アチコチに他校のテント村が出来、夏場と変らぬ。小屋で昼食を取り上高地に向う。朝から晩迄二日間もスキーで歩いていると足に靴ずれが出来痛い。

上高地の木村氏宅にて一泊、久方振りに飯シャリにありつき、風呂に入りさっぱりする。19時頃より星が出て、月が光々と照っている中を風呂上りの良い気持ちで小屋に戻る。さすが冬山である。10分位の間に濡れたタオルがノシイカの如くになっている。ここつに入り山の話に花が咲く。明日はいよいよ合宿最後の日である。何処かでイビキが聞えて来る。色気のない話である。又雪が降り出した。静かにシトシトと-----

<山日記ヨリ>

今日迄の冬山での苦勞の歸いは、うその様に感じられ、楽しい思い出と変りつゝある。この気持ちで山に行く価値のあるものではなからうか?。若き日の思い出として生涯残るものは、どんなに楽しかった事、又どんなにロマンチックな事よりも、山に於ける種々の苦勞ではなからうか?。これこそ本当の思い出となり、幾度話してもあきたらぬものであると思う。以下略。

二ノ俣(8:40)ー横尾(11:20ー12:00)

穂沢(14:00) — 明神(15:00) — 上高地(16:15)

12月29日(木) 雪

山でのくせで早朝より眠がさめるが、寮に居る様にのんびりとし、コタツの中でタバコをフカス。これから登る人々があわただしく出かけて行った後で食堂に行き、メシを食う。今日でいよいよ合宿も終りである。最後の日と云うのに天気は悪い。穂高連峯はガスに包まれ、まだ覆っている様である。

山に別れをつげ一気に沢度迄下る。途中幾組かの登山者の party に合う。皆元気である。一つの目的を完了した我々は、ほこらしげにスキーを飛ばす(飛び程滑らぬが……)。沢度にて解散。倉藤の他は乗鞍にスキーに行く為鈴蘭行きのバスに乗る。倉藤一人小型バスで松本へ、長かった合宿のつかれが一掃に出て来る。梓川にぞってバスは一路松本へと向う。

帝国ホテル(10:15) — 中ノ湯(11:20) — 坂巻(12:30)

沢度(14:00)

あとがき

かくて冬山合宿は終ったが、当初の山行きの目的は成功裡に終ったであらうか。我々部員がベストを尽した山行を、今静かに振り返って見る時、今迄感じられなかった欠陥が発見されて来る。我々は横尾々根より槍ヶ岳迄へのトレースに成功した事は確かである。しかし槍へのトレース成功が合宿の成功と直結するとは考えられない。我々大学山岳部に於ける山行は合宿としての意義の方が大事なのである。即ちアタック迄の行動に山岳部としての意義があるのである。槍へのトレースはその結果にしかすぎない。こう考える時、今回の合宿について色々反省せねばならない事が山程ある。始めにこの合宿に於けるオーの難所とした2のカリーの登攀(全てリーダーの責任にかゝって来るのだが……)、出発が遅れた為部員を一時的にしる危険にさらした。オ二に合宿中のリーダー権の確立、現地偵察の要責任、上げればいくらかでもあるが、今合宿に於て問題となる大きな事柄と云えば上記の三つ位であらう。これらについては全く常識的な事柄に過ぎず、深く反省している次第。

この様な事を考えると、まだまだ我々山岳部の在方又はリーダーシップの在方について研究する必要がある。又厳冬期縦走合宿についても今一考察

なおさねばならぬ点がある様だ。

完全トレースに成功したから一応成功と云えるであろう。しかしこの合宿が合宿として成功したか否かは今こゝで結論は出せない。今回の山行きに於ける教訓と自信が数年後どの様に発展して行くか、それを大きな目で捉えた時に初めてその結論が出て来るものと確信する。最後に我々はこの合宿に於て十分なる研究とファイトを持って退く存介斗った。隊員の意欲的な行動は楽しい思い出に満たされた山行となり、云い知れぬ満足感を抱いて上高地を後にした。下山する度に苦しい楽しい思い出の数々が走馬燈の様に胸の中にあたりかくともされていた。

最後に、この合宿に於いて、色々御援助下さいました、O日並びに学校関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

以上 倉藤記。

冬山食料雑感

森本全彦

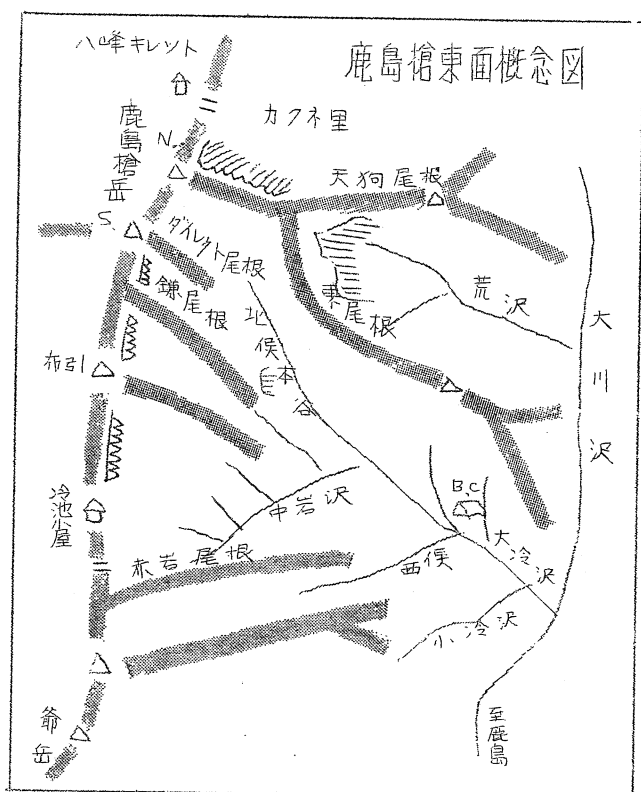
食料係二谷が身体の調子が悪くなったため、途中にて彼の縦走参加を断念せねばならない結果となった事は、この縦走に空白をきたし残念に思います。主食(餅、カンパン、パン、ソバ、クラッカー)の内、餅は不用なるものと思えます。

縦走中、少量の餅をもって歩いたが、広瀬さんを除いた他は、こんな重たい物なんか捨ててしまえといえども、餅好きの広瀬さんは、個人装備として持ち歩きと一人でがんばっておられた。一日180円也の食料、近來まれにみる豪勢なものだった。二谷の分まで我等5人が食べたのであるから結局216円分を食べた事になる。毎日ベーコンはうんと食べるし、食うのになに一つ不足はなかった。

食料の軽量化という点について、まだまだ戦わねばならないだろう。現在の課題は、餅の全廃、乾燥野菜の研究であろう。これは根気のいる仕事であり全員が考えるべきだと思います。冬、春の積雪期は1日180円~200円として、おいしい物をたんと食べるべきだと思います。又食料係しかわからぬようなパッキングの仕方をやめ、誰にもわかるようにしたい。

食料係不参加の結果、毎日の献立がむちゃくちゃになり、カロリー計算が出来なかった事を非常に残念に思い、参加者全員が反省しております。

通り一遍の文章となりましたが、あしからず。



KAZU.

後立山・鹿島槍ヶ岳東面

1960年5月

・新人観迎合宿・

(記録)

- (1) 東尾根
--- 武田雄三(経1)
- (2) 赤岩尾根
--- 村上与利(営1)
- (3) 鎌尾根
--- 福田信三(理1)
- (4) グレイクト尾根
--- 二谷和成(経2)

＝ま え が き＝

新入生観迎山行及び中堅部員の強化合宿として、5月の大冷沢をベースに鹿島槍ヶ岳の各尾根の登攀、新人訓練等を行った。

5月合宿は、時間的にも制約されるため、アプローチの短い鹿島槍東面を選んだ。

参加

4年 広瀬、伊藤、藤安

3年 C.L.倉藤、L.大隅、柏木

2年 森本(装)、二谷(食)、飯田(記)、小松(気)、柳木、岡田

1年 武田、上田、長谷川、村上、後藤、福田

行 動 表

	東 尾 根	兼 尾 根	赤岩尾 根	ダイレクト尾根
4/10	藤安、大関(L) 森本、鶴木、小松	倉藤(L)、二谷 飯田、岡田	〈グリセード〉 広瀬他、1年生	
5/1		全員グリセード 北股本谷		
5/3	倉藤(L)、飯田 二谷	大関(L)、森本 鶴木、福田、上田、武田	伊藤(L)、小松 長谷川、後藤、村上	広瀬(L) 藤安
5/4	倉藤(L)、岡田 1年 6名			大関(L) 2年生 6名

鹿島槍ヶ岳・東尾根

(経 1) 武 田 雄 三

パーティ 倉藤(リーダー)、岡田、上田、後藤、武田、長谷川、村上。
食当に起され、眼あけまなこをコスリコスリB.C.を出たのか五時三十分。
山はまだ静かに眠って居た。黙々と谷をつめ川を渡る。中岩沢の出合でアイゼンをつける。妙に風が生暖いのが今日の天気の悪さを語っている様だ。三の沢の出合で、大関サン以下のダイレクト屋根のパーティと割れる。南峰が獲いかぶさって来る様だ、岡田サンを先頭に黙々と登る。なにせ初めての事故に傾斜の判断全くつかず非常に急に感じた。雪はしまっておらず、アイゼンの団子に気を配りつつ登る。丁度沢の中央の辺りに右側の支稜からエゲツナイ色のデブリが押し出している。倉サンにせかされる傍にピッチをあげる。担荷の疲れか、慣れぬ為か、とにかく非常にえらい、3/4位登った所に菫の埋った様な所があり、クレバスが開いて居た。突然、ザーと云う音と共に、我々が先程急いで通った沢中央、右側の草付から雪がおっちちた。ほんの細やかな奴だ。だが、倉サンの好判断の御陰で被らずに済んだ。新人部員ばかりなので第1岩峰は本谷側を捲く、第2岩峰までは長い雪面のトラバース。雪がくさりかけているので時々ドスンと足場を踏み抜く。こういう時は重い者は損、小生少々重いばかりに、この役をひきうける事となり、はなはだ不愉快であった。ヒーヒー云いながら第2岩峰の下にたどり着く。風を避け休憩する。ウマイモのを食べ元気を回復、第2岩峰も捲く。岩と雪と這松のミ

ックス、ツアッがカリカリと泣く。少し登ると其処からは尾根上を速実にトレースする訳だが、ポピュラールートのため、ラッセルがはっきりついて居る。何処やらでグエーグエーとガマの鳴く様な声がある。雷鳥の声やと教えられ驚く。少し悪い部分が残っているが足にはまだ暖かそうな真白のオーバーシューズをはいて居た。7米程のナイフリッジを慎重に渡る。荒沢側の切れこみは想像していた以上で、落ちたらと思うとゾッとする。渡り切って暫く登ると、人が4人程居て、展望のきく所に出了、もう尾根上には此処より高いところは無かった。北峰の上に立って居るのだが、少しも感激がない。南峰のほうが高いからか、それもある。それとも連れられてゾロゾロ登った為か、それもある。最も大きい原因は登高欲の欠陥にあった様だ。寒いし、曇天の端に展望もきかないので、早々に下る。ウインドクラストしていて、アイゼンが良くきく。北侯本谷に少し下ったところで風をさけて休みカンパンをかじる。テルモスの紅茶がうまい。ダイレクト尾根に登っている大関サンのどなる声が手にとる様に聞える。コールしてみたが風に流され聞こえぬらしい。ドンと云う音と共に鎌尾根から岩ナデが落ちた。細いガリーを落ちて空間に消えていく。

“いこか”の声に腰をあげる。少し下ってアイゼンをはずす。此処からは待望のグリセード。倉サンが一人で滑っていく。よし来いの声に勇んで滑る。倉さんはゴルシュ状になった所上部に立ってストップする様に指図する。小生うまく止るつもりだったが、スピードの出し過ぎの為に、アッと云う間に鬼事に空中転回して雪面に叩きつけられる。瞬間的に死が頭をかすめ去る。あわててストップしようとするも肝心のピッケルは手から離れている。シャフトをつかみ、ピッケルを打ちこもうとした瞬間長谷川にぶっつかって止った。この間2~3秒位だったろうが非常に長く感じた。倉サンにどなられる。雪はくさっており、大小のデブリでガタガタなので終いには皆なしで制動で下る。巾50cm程のクレバスが沢を横切っている。グリセードでジャンプして越し尻制動ですべる。また、く間に尻が冷えて来る。ワイワイ云いながら滑っていたら何時の間にもやら出合についていた。

5:30 (出発) — 6:00 (三の沢) — 6:50 (橋線下) — 8:50
(北峰) — 10:30 (BC)

5月合宿、赤岩尾根より鹿島南檜

村上 与利一(営1)

5月3日 晴、パーティ 伊藤、柏木、小松、村上、長谷川、後藤

今日のアタックは赤岩尾根より鹿島のS.P.へ行き鎌尾根を下るコースである。

僕が山岳部に入ってから始めての山行きである。今までに雪のついた山は歩いたことがなかったが、アイゼンをつけ雪をふみしめて歩いていると、フワイトがわいてくるようである。グリセードやストップの練習をした所をすぐ西俣沢をどんどん登っていくと、柏木さんのせんせくが始まったので、ここから一人で引きかえすことになった。時間は7時40分。

この柏木さんは来しな川を渡る時、体がこんまいのせ川へばちゃんと落ちた人である。腰線に出たのが8時10分。ここからS.P.へ向う。左側には黒部をへたてて立山連峰がきれいに思えることが出来る。伊藤さんに色々説明してもらい、夏はとい面に見える三ノ冠の雪渓を登ることをおしえられて、ごついなあとと思った。

小石まじりの夏道を歩くことは、アイゼンをつけているので頭にがんがんにびいて非常に歩きにくいので、だいぶんこたえる。

S.P.は目の前に見えるが、途中には布引岳があり、なかなかたどりつくことが出来ない。ふらふらになってやっと頂上についた時には非常にうれしかった。時間は9時50分。

ここで昼のカンパンを食べていると、風がびゅんびゅん吹くので食べづらくケルンの影で1個1個口にほりこみながら休んでいると、鎌尾根を登った連中が北又本谷が下れないといって引きかえして来たので、食事もうちに引き上げることにした。

帰りはみんなと一しょにわいわい言いながらケツスケートをしながら鎌尾根より布引沢へ下ったが、途中でかた足が雪の中にうずまってしまってほりかえすのにひと苦労をしたが、上の方ではイチが両足をうずめてわめいている様子はおもしろかった。だが、そのケツスケートのおかげでズボンに穴をあけた者がたくさんおり、みどいになるとパッチまでやぶっていたのかもしれないので、テントにかえりつくと、これらのつくろいがまっていた。着ノ2時ヌ5分。

ダイレクト尾根

二 谷 和 成

日時 5月4日（曇）

パーティ L.大関和夫（E3） 森本全彦（J2） 鶴木 洋（L2）

小松史朗（S2） 飯田 進（E2） ニ谷和成（E2）

3時半起床、天気はあまりよくないらしい。昨日の天気予報では下り坂だということだったので、すこし様子を見ることにして、朝めしだけは食って皆各テントで待機。5時頃、天気は今日一日はどうやらもつたろうという判断を下し、6時出発する。

我々のテントはテント場の一番下にあるので、よそのテントの間をぬっていく。三の沢の出合で東尾根アタックパーティと別れる。どうも雲行きがよくなく、天気が悪化しそうで気味が悪い。北俣本谷をダイレクト尾根の末端（完全なる末端ではない）を目指して皆黙々と登る。北俣本谷は両サイドからデブリがきており、ガタガタで実に歩きにくい。取付きからは、相当急な傾斜をもつ雪面になり、キック・ステップで慎重に進む。

一昨日降った新雪も、もうないんでいるようであって、春のようにラッセルがないので助かる。急な雪面よりブッシュを交えた岩場となったところへ出たところで、30mのザイルをフィックスして通過する。ここがダイレクト尾根の最もせまい所であって、通過に相当の時間を費する。この間にもどこかでドドッという気味悪い雪崩の落ちた音がきこえた。

東尾根のパーティがアタックを終えて、北峰から降りながら手を振っているのがよくみえる。ここを過ぎると、急な雪稜となり、皆少しバテ気味ではあったが元気に一歩一歩登っていく。天気の方もいいとはいえないが高曇りといった程度で、遠くの山々もはっきりとみえる。フィックス地点を過ぎ、ブッシュを交えた雪稜とも雪面ともつかぬところへ出てから約1時間で南峰の頂上に立つことができ、皆ホッと一服する。丁度連休であって、他の社会人たちが頂上にたくさんたむろ（失礼かも知れないが）していて、いつも頂上に立った時に味わえる征服感や満足感というものがあまりわいて来なかったのは残念であった。

北俣本谷の雪崩の危険を考えると、ここでゆっくりするわけにもゆかず、すぐトソコすることにする。北峰と南峰の間まで換線を下り、コル状のと

ころから皆北俣本谷をグリセード・シリセード（尻制動）で一目散に下る。途中で立止ると、なまめい風が吹いて来るので気味が悪い。三の沢の出会いまで下ると安心感があるのか皆の顔には疲労の色が濃く、北俣本谷をここまで下った元気もどこへやらで、ここからの足どりが急に重くなった。その上、靴の中に水がたまって、歩く度に音楽をかなでる(?)のには参った。テントには11頃に帰る。今日のアタックもこれで終わったというやれやれという気持と満足的气持が入り交ったような変な気持にとられる。何としても、心配された天気は何とかもったということは幸運であった。時間的には割に早いアタックではあったが、楽しいものであった。



一 奥又白の岩場三題

- I. 前穂北壁よりAフェイス
- II. 四峰甲南ルート
- III. 四峰明大ルート

(理四) 越田 和 男

乙、数年来、夏山合宿は剣と決めてしまっているのですが、穂高の岩場に接する機会が少ない様であるが、僕は秋の分散山行には毎年穂高を選び、穂高の岩場に接する機会に比較的にめぐまれた。特に今年は、9月に二年生の森本、鶴木両君の同行を得て奥又白へ、又10月にも森本、二谷、武田君等と共に、千丈沢から槍を経て涸沢入りする事が出来、その間奥又白の代表的なルートとされている上詔三ルートに登る事が出来たのはうれしかった。以下その時の経行文であります。

— ○ — ○ — ○ — ○ — ○ — ○ —

Ⅰ) 前穂東面、北壁より A フェイス登攀

7月8日(晴れたり曇ったり)

メンバー 越田 (S.4) 梶木 (L.2) 森本 (J.2)

ザイル 30m 麻 2本、カラビナ、ハーケン若干(ハーケン使用せず)

記録 又白池テント(7,25)—C沢—北壁取付点(9,00~15)—
東壁第二テラス(10,30~50)—前穂頂上(11,50~13,30)—
A沢—テント(14,30)

昨日終日降り続いた雨も夜半には上がり、今日はどうやら一日もちそうである。ガスが上がりづらいのが気になるが、天気図からみても大丈夫だとして出発する。

池より奥又の本谷へと下り、雪溪のない文字通りのガラ場をB沢の末端目指して登る。(C沢への兼な行き方を一昨日偵察しておいた) ほんのわずかに残っている雪溪のシュルンドに入ったりしてインゼルの下を捲き、C沢へと入る。C沢にも残雪は全然ない。ガラ場を歩いたり滝を登ったりするのは、取付きまでの良いトレイニングになる。C沢に先行パーティがあったので落石に気を使ったが、後続パーティがなかったので比較的気が楽であった。それでも自分の落した岩のガラガラと云う音を聞くのは恐ろしいものである。その頃は丁度ガスがかかっていて、まるで地獄の底の様な感じであった。先行パーティはインゼル上部から明大ルートを偵察して、下駄っていったので我々だけになり、ぼっとする。C沢が大きく右へ曲がるところでインゼル上部をトラバースしてB沢へ入る。B沢は左岸の岩の堅いところに行く。北壁の取付き点は、顕著なDフェイスですぐにわかる。Dフェイスの下をトラバースぎみに登り、かなり上まで来て、さてアンザイレシようかと思ったところはすでに松高カミンのすぐ右のところだった。

アンザイレシして松高カミンの取付きまでトラバースする。北壁は陽が当たらないので、岩がまだぬれたまゝで、イヤな感じであった。松高カミンは考えていたよりもずっと楽で短かく感じられ、打ってあるハーケン一本で楽に乗り越す。むしろその上の緩傾斜のガラ場がジメジメしていて気持ち悪かった。北壁テラスまで一ピッチである。北壁テラスを左へトラバースして北壁上半部の取付きへ行く。この頃よりガスは晴れ上がり、又東向きのところへ出て来たので、岩も乾いており快適なクライムとなる。この辺りの高実感はスバラシイ。ムムニイ状のところをくぐりぬけ、テラスより二ピッチで東壁第二テラスに登る。

第二テラスはなくて明るい、昨年の秋に来た時は30センチもの新雪で、

とてもおんびりなんか出表なかったが、今日はここから上は二度目だと言うのもあってか、かなりのおんびりした気分でも物を食ったり茶を飲んだりする。Aフェイスは昨年はどまん中のクラック状のところを登ったので、今度はおつと右の最も一般ルートとされているところを登る事にして、トップを森本と代る。(ひさしの様につき出た岩の真下から取付く。) ニピッチ目で昨年のルートと合し、三ピッチで登攀は終了する。この三ピッチは実に快適そのものであった。後はザイルを肩にガラ場を前庭頂上へと何う。

頂上では二時間近くも日向ぼっこを楽しみ、槍がガスから顔を出すのを待ったが、とうとう姿を見せてくれなかった。A沢経由で走る様にテントへ帰り、上を見ると雲一つなく晴れ上がっている。テントの横にねそべり、今登って来た岩を眺められるのは楽しいものだ。夏ならさざかしのぎやがであらうこの池も、今は我々の他に少人数のニパーティが居るだけで、実にのおんびりしていて気持ち良い。

II) 四峰甲南ルート登攀

7月10日(晴)

メンバー 越田(S4) 瀬木(L2) 森本(J2)

ザイル30m 麻2本、カラビナ12個、ハーケン10本(ビレイ用に3本
使用したのみ)、二段アブミ1

記録 又白池テント(7.15)—T₁(8.00)—T₂(8.10)—T₃
(9.10~.20)—ハング乗越(10.30)—登攀終了点(11.20)—北
尾根五、六のゴル—テント(13.30)

東壁に登った翌日は一日中ドンヨリしたうっかしい天気、岩壁はガスに閉ざされていた。その翌日はすばらしい天気、憧れの甲南ルートへといさみたったのである。

一昨日同様、C沢の滝の下まで行き、そこから四峰へと取り付き、踏跡通りT₁まで行く。小休止の後T₂まで這い上がり、乙、でアンサイレンする。岩も乾いており、北壁の様なジメジメした感じはどこにもなく、又技術的な難かしさもないので、なんとなく気が軽い。T₂より右上へ30mスピッチ。その後ほとんど水平に右へトラバースして1ピッチ行き、5m程登ったところがT₃である。T₃の右端のピナクルのところまで行き小休止し、ルートファインディングする。次の1ピッチが乙のルートのクライマックスであり、なるほど立派なハングを持っている。

ピナクルから約7m左の凹角に取付き、8mほど直上し、3mほど右ヘトラバースする。ハンゲの下まで約5m直下し、近藤先輩が股に挟んで苦しんだと云うリップのところを斜めに、ハンゲを取付す。このハンゲではアブミの助けを借りたが、それでもちよつと手こずってしまった。もちろんアブミなんか使わずに初登攀された近藤先輩には頭の下がる思いであった。ハンゲを乗越してから左へ水平に約6mトラバースしてアンカーレッダに達する。このノピッチを三人が乗越すのに一時間以上も費やしたが、やはりホツとした。要所には必すハーケンが打つてあるが、その全部にカラビナをかけザイルを通すと身動きがとれなくなるから注意したい。

次のピッチは草付きを右上に進む。こゝでトップを森本と交代する。このピッチ、やさしきやうであるが、あまりすっきりしなく、うかつに気合いをぬくと危いところだ。2ピッチ岩の堅いルンゼ状のところへ出る。こゝが登攀終了点である。ザイルをほどき、一昨日見れなかった槍を覗ながら昼食とする。

帰路は北尾根縦走路を五、六のコルまで下降り、明瞭な踏跡を興又白池へと急ぐ。池は他のパーティは全部引上げて、とうとう我々だけの別天地となった。日大の連中が残していつてくれたウマイ物をたらふく食べて、もらった石油をボンボン燃やしてコンパとする。我々も明日下山して、イヤな試験の待っている学校へ行かねばならぬ。こんな静かな興又白へ又来る日があるだろうか。二年生の森本、鳩水はまた来よう。しかしオレはめったな事では来れそうもない。

— — — — —

Ⅲ) 四峰明大ルート登攀

10月20日(晴)

メンバー 越田(S4) 長谷川(B1)

ザイル ナイロン30m、ハーケン、カラビナ若干。

記録 潤沢()—五、六のコル()—興又本谷—明大ルート
取付き()—登攀終了点()—五六のコル—潤沢()

もう来れないと思っていた興又白へヶ月余り後にまたやって来る事が出る。今度の秋山は参加人員も多く、天気にもぐまれて、ずいぶんいろんなところへ行けたが、この日は元気な一年生 ケイちゃんこと長谷川君の同行を得て、この明大ルートへやって来た。倉藤も武田と組んで我々と平行に登行会ルートに登った。

倉藤のパーティと一緒に奥又本谷へ入る。四峰のよく見えるところまできて、ルートの説明をして、C沢の末端目指してガラ場を急ぐ。この日も奥又白は静かで、我々の他に岩登りする人はない。

明大ルートの取付きは、C沢を登り、右に赤茶けた岩のあるところのすぐ上である。こゝで倉藤とは別かれる。登高会ルートは明大ルートのもう少し上で平行に登るルートである。C沢から一段登った大きなテラスでアンザイレンする。明大ルートは、比較的楽なルートとして知られているが、ルートファインディングはかなり難しいとされている。そこで我々は確実に明大ルートを追跡するのをやめて、もっぱら自分の感で登って見る事にした。しかし例の小ハングを乗り越すところでは正規ルートと一致した様である。勝手なルートを取ったので、こんなにはポピュラーなルートであるにもかかわらず、ビレイの為のハーケンが全部自分で打たねばならなかった。その為か、倉藤等が登高会ルートを一時間で登ってしまったのに、我々は約二時間もかかってしまった。

取付きからジグザグに3ピッチ、4ピッチ目にハング帯に達する。小ハングはハーケンを利して腕力で乗り越す。5ピッチで傾斜はゆるくなり、コンティヌアスで倉藤等の待っているところへ行き登攀を終る。明大、登高会両ルートとも一年生を混えたパーティに好適のルートと云えよう。

五、六のゴルから酒沢へ帰り、テントをたたんで横尾まで下がる。

——前穂四峰日本登高会ルート——

（経1） 武田雄三——

パーティ （L）倉藤孝次（E3） 武田雄三（E1）

カールの上部に日のさし始める頃、明大ルートに行く仲間と共に出発。5、6のゴルめがけてガレ場を一気に登る。一息いれてガレ場を右と競争。5峯からの小尾根を越え、更にガレを下り本谷の一番下部に立つ。雪はさすがに残っていないかった。

見あげる目に4峯正面、東壁が覆いかぶさって来る。4峯はまるで巨木を神斧で打ちわった様。縦の節理が男性的だ。多くの山の先輩達がこの4峯に魅せられたのは当然だろう。甲南ルートはすぐに判ったが、まだ目標のルートは見えない。本谷の中間で一休みして大体のルートの観察をする。一気に詰め、小滝の右側を捲いてC沢に入る。少し詰めると右側に赤茶けた四角な

岩が隠れた。此処が明大ルートを取付点なので、越サン、壺4ヤンと別れて暫く、東南壁の近付く頃適当な場所を選んで取付く。トップは倉サン。赤いザイルが草付のリンネ状の壺をスルスルと走る。ヨシ美いの声に、浮石に草に注意しながら快調のノピッチ。調子が良いのでスピードが出る。しかし、岩が逆層なので何処に立っても安心感はない。スピッチ目の途中、不用意にも拳大の石を落す。音もなく川沢にすい込まれ、白煙をあげて碎ける。ゾツとして一瞬冷汗。4ピッチ程で草付の斜面が終ると左方へ走る鋭い岩壁の下に出る。ルートを右に右にL字型洞穴に迷い込まぬ様に、6ピッチ目で凹角を超えるとゆるい斜面に出る。4峯の写真を見ると、頂上から少し右下に一段下ったコブになった所が判るが其処である。此処が明大ルートとの合流点なのだ。更にスピッチ程登った所の岩陰で風をさけながら明大ルートの仲間を待つ。コールしてみるがさっぱり応答なく、暇なので突如した岩に又入って登りだべる。伏臥した眼下には秋晴れの下、梓川の流れ、針葉樹の鯨、徳沢園の屋根全てがうるわしく映る。此処迄の所要時間丁度一時間。早いペースだった。小一時間程すると先程の凹角の上の所に赤い鮮やかな花が咲いた。続いて黄色のヘルメットが浮かぶ。互に感想を語り合いながら昼食のカンパンをボリボリ。一仕事の後はなんでも美味い。

左に捲いて尾根路に、紺碧のスカイラインに一昨日越えて来た槍のシルエット、記念撮影のシャッターを落とす。

今度来る時には必ず甲南ルート左の思いを秘め、ガレ場をテントへといせいで。

チンネ左稜線

文 2 鶴 木

洋

7月 日(晴) (L. 倉藤孝次(E3)、鶴木洋(L.2))

前日、倉藤氏と池の谷に入る食糧をホッカに来た時、どこかの連中が登っていて、スカイライスをいい調子で登っているのを見てすっかり二人が気に入ったのがこの左稜線である。全員でチンネ・ジャングルムアタックの時、そのルートを登る機会を与えられた。

ピトンをガチャつかせながらチンネ下部の雪渓をトラバースして、ラントクルフトを飛び越えて取り付く。短かいガリーに入ってから出口で右のリッペにしがみつく。ハイマツの付いたレッジに出ると、ここからがフェイスに

なっている。倉ハンはすごい馬力で登って行く。その見事なバランス。いつ見ても上手だ（HOMESUGIKANA）。3ピッチで突き出た圧倒的な岩峰に出る。この岩峰は右にまいて岩と岩とははさまれた所に出る。ここをバックアンドフットで通過する。ここからハイマツのリッジに乗り、その上をフワフワと歩いて草原にでる。ここハッ峯の方を向いていて三ノ窓からは見えないが、日当りの良い気持ちの所である。ここで昼食。アタック食の貧弱なことを二人で文句云いながら食べる。

ここからのカンテは一本の草も付けない岩で快適である。ジャンダルムの連中がしきりに何か云っている。写真を取ってくれる事を期待してステキな姿勢をして登る。2ピッチで3個の小さな岩コブがある所に来る。これは強引に身長にものを云わせて登る。これから2ピッチで中央バンドに降りるテラスに出る。倉ハン「上もやってしまおか」。これはかんべんしてもらった。左方カンテ・上部左稜線はナンネで最も技術を要する故である。

ここよりアップザイレンして中央バンドに降りる。ピクナルの上で順番待ち。ここにも人口過剰の余波が赤ている（ARIGATAYA・・・）94ムニーの方はつまっているで、αバンド・ホクラックの方にする。何んのことはなくナンネ頂上へ。

＝『穂高岳登山史抄』（諏訪多米蔵）より、甲南山岳部の歩み＝

・前穂高岳

- 1931. 7. 25 田口二郎他3名、北尾根三峯フェース初登攀。
- 1932. 7. 20 近藤実、山口貞夫、四峯東南壁、甲南ルート初登攀。
- 1932. 8. 13 伊藤新一、同収二、前穂高東壁の北壁初登攀。

・北穂高岳

- 1927. 7. 16 伊藤愿、滝谷第二登、単独行による初登攀。
- 1931. 7. 27 田口二郎他3名、滝谷第四尾根P.5。
- 1931. 7. 29 田口二郎他3名、滝谷第二尾根北山稜初登攀。
- 1931. 8. 9 田口二郎、伊藤新一、滝谷第三尾根初登攀。
- 1932. 7. 23 近藤実、山口貞夫、滝谷第一尾根丁3まで初下降。
- 1932. 8. 9 伊藤新一、収二、滝谷第一尾根初登攀。

・奥穂高岳

- 1930. 7. 17 伊藤愿、田口一郎、ジャンダルム飛騨尾根初登攀。

〔現代登山全集（創元社版）第十巻「登山の技術と基礎」261頁より、甲南山岳部による主なる初登攀。〕

夏山 劔岳合宿

まえがき ----(高2) 乾

日誌 ----(中1) 堀田 弟
(中2) 南里

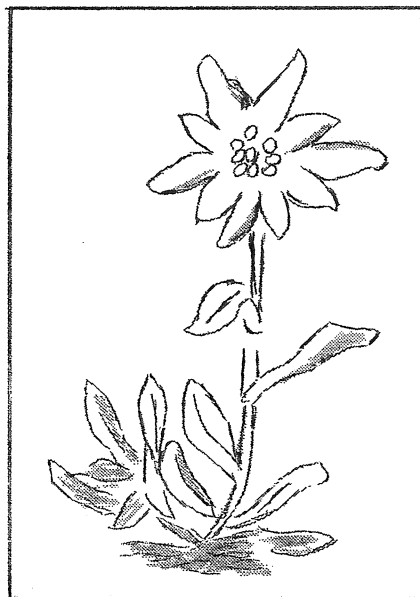
食料計画 ----(高2) 乾

=岩登リ=

ハッ峯3峯側壁

----- (高3) 永島孝男

甲南
高
中
学
校
山
岳
部



TAKAYA

夏山前書

高三 乾 隆 也

今迄の合宿では、合宿主戦を採っていたと思われる。これは種々の欠点を生じる。限られた上級部員だけでアタック行動をし、他の部員は、テントキーパーに成り勝ちであるからだ。これは、上級生の決めた山に、サポート行動を共にするだけで、その他登山として得る所が少ないからである。これは下級部員にとっては適した登山ではない。

大学生の諸氏も、中学や高校に入学してからの短期間の経験で、山に対して未熟な部員の合宿行動はおもわしくないといっておられる通り、登山者は、体力、技術だけを身に付けるだけでなく、山に登る最初に必要で最も重要な山の知識を広めて、個人で山を歩き廻る時の様に、合宿や縦走に行っても、山に対する愛情の中に、山の常識よりも一層深い知的な事を身に付ける様に心がけて行くのが、将来立派な岳人と成る為の根本だと考える。こう云う理念のもとに、中高は、剣、立山を縦走し、一見楽しそうに行う内に登山のきびしさを知りたいと考えて計画を作った。

——35年夏山計画表——

高 三 乾 隆 也

8月 5日

富山 → 狹名 → 大日平

6日

大日平 → 大日小屋

7日

大日小屋 → 雷鳥沢

8日

雷鳥沢 → 地獄谷 → 一ノ越 → 雄山 → 大汝 → 真砂岳 → 別山乗越
→ 剣沢 (剣沢にて、中級部員のグリセード訓練)

9日

剣沢 → 別山岩場 → 剣沢
 ↓ ↑
 グリセードの練習

10日

1. 剣沢 → 八峰、六峰岩登り

2. 一般コース → 頂上 → 剣沢

11日

剣沢 → 二股 (グリセード練習)

12日

二股 → 仙人峠 → 地平山 → 仙人峠

13日

仙人峠 → 宇奈月 → 富山

——夏山日記——

中 一 堀 田 正 泰

八月三日

昼ごろ高校の部室に集まった。そして荷物をつめて2時ごろ部室を立ちま
した。

そして大阪駅に着きました。

そして「ちくま号」に乗りました。汽車なのでなかなかねられないので、
本などを読んでいると、もう2時なのでねました。でもやはり汽車なので、

煤煙が入ってきて車内の空気がわるいので熟睡できませんでした。

八月四日

朝早く富山に着きました。そしてそこから電鉄富山に乗り、車内で朝ごはんを食べました。

みんなつかれているのでねてしまいました。

めがさめてみると、しようみようという駅につきました。駅には先登隊の藤原さん、安井さん、竹原さんの三人がまっています。

そこからケーブルに乗りました。そこからバスで新穂ヶ原まで行ってそこから坂を登りました。

すこしたったら雨が降って来たのでカッパを忘そうとおもったら奥の方なのでわからないので着ずに歩きました。

ぼくはさむさと雨にぬれないのとではたててしまいました。

やっとこさのことで雪鳥荘につきました。

高校生だけがテントで中学生は小屋にとまりました。

八月五日

きょうはみんなつかれたのと雨が降っているので沈黙することにしました。なにもしることがないのでぼーっとして一日を過ごしました。

八月六日

きょうは天気がよいので立山三山に登りました。

雄山の頂上でやすんでいると霧がかかってきました。

それから大汝山にのぼりました。そうすると霧が深くなってきました。

だけどファイトを出して最後に別山に登りました。

別山は割合道が良いのでつかれませんでした。ぼく達が山をおりようとするとき雨がぽつぽつと降り出して来ました。

テント場に着くと兄たちがジュースを作ってくれてくれました。

その夜はつかれたのでぐっすりとねました。

○

中 2 南 里

8月7日(日) 快晴

今日も気持ちよく晴れ、昨日歩いた立山三山がよく見える。朝食の後、テントをたたみ、雪鳥沢のキャンプ地を後に出発した。

安井さんと永島さんは後からいらっしゃる予定の高田先生と桑原先生を待つ

ため雪鳥沢に残った。急な雪鳥沢から剣御前までの坂道を暑さと有に食い込む荷物にあえぎながら、剣御前小屋までたどり着く。陰しく雄々しい剣岳が目の前に立ちはだかった。そこで休み、剣をうっとりとながめた。約20分ぐらいで剣沢のテント場へついた。小屋の前にはテントをはると小屋の人にもんくをいわれ、少し向こうの指定地へ引っ越した。テントを立ててからテントに藤原さんを残し、テントから見える雪溪でグリセードの練習をした。後から永島さんと安井さんが来て、先生はここまで来られず、雪鳥荘にとまられたそうである。練習を終え、帰りに雪溪を渡りきった直後、突然、雪溪がくずれたのにはおどろかされた。

8月8日(月) 晴

午前三時半起床、食事当番の安井さんと堀田さんはもう起きていて朝食のそうめんをしょう油で煮ていた。四時半頃、朝食はすんだがそうめんはあまりうまくなかったので、昨日の飯を暖めて食べた。今日は剣の頂上を目指す。五時半出発、剣岳一般ルート登り口についたのは午前六時半頃であった。一般ルートの岩場にはくさりがついていた。カニノヨコバイはくさを挟わずに渡りきった。正午近く標高3003メートル剣岳頂上に着いた。長次郎谷の上でカンパンと紅茶の昼食をすませ、長次郎谷の雪溪をグリセードで二時ぐらいかかりすべりおりた。剣沢の雪溪との出合につき一時間ぐらいでテントに帰った。先生方がテントにいらっしゃった。今朝六方フェイスに岩登りにいった堀田さんと永島さんがまだ帰らなかったが、安井さん達おさがしに行き、三十分ほどすると帰って来た。帰る途中に会ったそうである。

8月9日(火) 曇り

朝九時剣沢に張ったテントをたたみ、剣沢を下り、平蔵の雪溪をアイゼンをつけて一時間ほどで下りた。先に出発した先生をいつのまにか追い抜いてしまった事が雪溪を下りた所で分かった。そこから約40分ほど歩き二股に着いた。この日の夕食の焼きそばは、この合宿で一番ウマかった。別にすることもないので、テントの中で話しをしながら早めに寝た。

8月10日(水) 晴後曇り

朝七時起床、朝食を済ませ、午前九時頃テントをたたんで出発。今にもくずれそうな雪溪の上を通る時はひやひやした。昼すぎに池の平小屋の下のキャンア指定地についた。そこは芝ののびたような草が一面にはえた所で、とてもテントの中の居心地がよかった。ビスケットとカンパンと紅茶の昼食をすませてから水を汲みにいった。池の平小屋の水は何かが混っていて変な味であった。マカロニとジャガイモをケチヤップで煮た夕食を食い終った後、

ラジオを聞くと、明日あたりから台風が来て今日の夜は雨が降るということであつたので、結局明日早く撤収することになった。今夜のうちに明日の朝食のにぎり飯を作っておき、ナベの中にいれ、各自食器、スプーン等もしまつて、明朝すぐに出発できるようにしておいた。

8月11日(水) 雨後曇り

午前2時半起床。もう一つのテントの先生達を呼んで来て急いで朝食。雨はこの頃から降り出す。朝食がすむと急いで個人装備をまとめて共同装備を分けて持ち、テントをたたんで四時半頃出発。三十分程で仙人峠にさしかかり、湯煙がたち上がるのを見た。これが仙人湯であるということだった。午前十時頃に阿曾原に着く。小屋で着がえをしてから、11時20分発の関西電力の軌道に乗った。二十分ばかり居こちの悪い車にゆられながら終点につき、そこからエレベーターで一気に二百メートル程下りて、今度は二百二十円の乗車券を買い、まともな軌道にのった。この軌道は黒部川にそって走るので、大変景色がよかった。高田先生と桑原先生は途中の温泉で僕達と分かれた。約二時間ほどで宇奈月町についた。宇奈月で昼食をすませ、駅で大阪までの切符を買い、富山駅で乗り換え、十八時四十分発の汽車に乗り一路大阪駅へ!!

夏山食料一覽表

高2 乾 隆也

<主食>			
米	14升	ジャガイモ	20個
パン	56個	きゅうり	13個
ビスケット	30個	なす	25個
クラッカー	40個	キャベツ	2個
うどん	24玉	レモン	10個
乾パン	66袋	<乾物>	
マカロニ	15袋	梅干	5日分
そば	7玉	みりん干し	10枚
片栗	3本	御茶漬のり	30個
小麦粉	1袋	ふりかけ	15袋
<野菜>		わかめ	5袋
王ネギ	30個	茶	3袋
		干えび	150g

しいたけ	50g
ママレード	15袋
ジャム	15袋
ゼライス	5袋
<肉類>	
牛肉	400g
豚肉	200g
ハム	5本
ラード	4袋
ソーセージ	27本
マーガリン	4P
<飲料水>	
スキムミルク	2個
コーヒー	2袋
ジュース	4袋
紅茶	8日分
<調味料>	

みそ	500g
しょう油	0.5升
砂糖	5斤
コシヨー	2びん
味の素	9袋
塩	2斤
ケチャップ	4びん
マヨネーズ	2びん
ソース	0.5升
<その他>	
マギー	30個
佃煮	100g
チョコレート	30個
トーナツ	12個
ウイスキー	1びん
ビガー	5袋

——夏山食糧反省——

高2 乾 隆也

今回は、カロリーが多く、調理が容易であつたので、山での食糧としては申し分のないと思われる。野菜はくさらない物を選び調理して行つたので、短時間にて食事がとれた。炭水化物、蛋白質をやめて、カロリー源を極めて脂肪にたよるうに計画したのは、炭水化物で腹をふくらましてエネルギー源は少く、消化は極めて悪いのを見越して考えた。反省しなければならないのは、昼食が終り迄乾パン、ビスケット、クラッカーにした事である。数日は沈滞の時として、もっと栄養のある物で少しの加工を必要とする食糧品を加えたい。今迄も皆んなの意見を聞いて、食費は高くてもよいから、おいしい物を食べ様とする傾向にあるが、これはどうしても荷が重くなる事が欠点であるので、昼食、主食、乾物の種類を少くして行くな、又は乾燥をして行く様に心がけたい。それに、いつも予備食、非常食が多すぎ、あまる点を考慮に入れて計画しなくては、サポート行動にさしつかえるので、もっと綿密に献立を作らなくてはならない。

夏山装備表

品名	数	備考
テント	2	4～5人用
ペッグ	2	
グランドシート	2	
ザイル	2	2本とも40 m
ハーケン	20	12本使用
カラビナ	10	
ハンマー	1	
ホエース	2	No. 625
ナベ	4	大ナベ2、中ナベ2
ガソリン	15 l	全部使用
庖丁	2	
ノコギリ	2	2つとも大型
しゃもじ	3	
お玉じゃくし	2	
ローソク	5本	全部使用

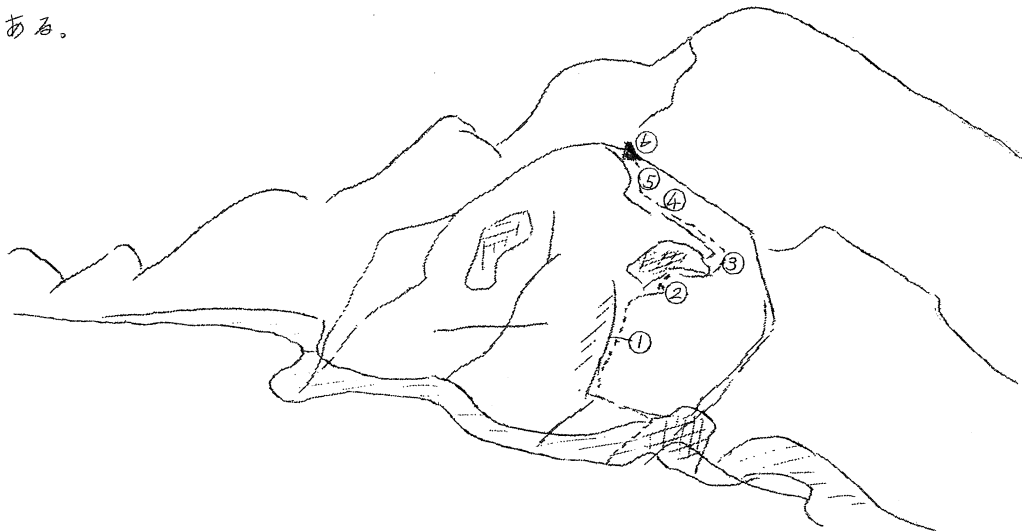
—— 剣岳ハッ峰3峯フェース ——

—— 岩登りを振り返り見て ——

3年 永島孝男

目がさめるとすぐテントから飛び出した。雲一つない絶好の岩登りの天気である。朝食を取り堀田さんと準備をすませ、テントの他の人々に送られて出発した。もう八時をちょっと回っていてかなり太陽が強く、剣沢を下っている時汗が流れていた。源次郎との出合いで少し休んだ。源次郎屋根にも人は見あたらず、シーンとしていてハッ峰が何んだか気味寒く見えた。十分程休んでふたたび足をめざす六峰フェースへと進めていった。いよいよ目的地に到着した。岩を見ると、大学部員や先輩などに聞いたリ本で読んで想像していたのとはちがい、とうていハーケン2、3本で登れる様な岩とはちがった。しかもCフェースと思われる所は、バンドやクラックの裂目もほんとに

少しで浅く山靴が滑る余裕も無い程で、確かにハーケンの跡があり登った形跡はあったが、今準備している道具や資料では無理だった。念のため尾根のピーク数、それに持ってきた資料と岩とを見比べて数度なしらべて見たが大峰にちがいがなかった。一時間余り岩とにらめっこした後、岩の右側のスロセンチ程の裂目に沿って登ることにした。岩と雪渓との間にだいぶ大きなシュルンドが生じていた。ピッケルで足場を切ってゆっくりと3メートル程下の岩の取っつきに着いた。大きく割れたその間の底深くに一つの表ワラ帽が風にゆれていた。何となく気味悪かった。さあいよいよ自分がこの合宿に於て一番中心に置いていた僕にとっては初めての北アルプスの岩場を登るのである。



まず取っつく場所の関係から、割目に沿って直登することは無理であったから、右はしの方から登り途中でトラバースすることにした。この間、岩は、大変しっかりしていたが、何だか単純なツルツとした岩でホールドが少なくおまけにハーケンを打つ適当なリスまで少なく、必死の思いで登り、やっとの乙で一ピッチ目の所まで登った。ちよつとクラックがなくなってどうにか体をささえることが出来ると言う程の所で、ビレーするのに適当な場所ではなかった。次のピッチは思いの外楽で、ハーケン二本ぐらいで登ることが出来た。ここまで来たとき、進む予定を変えなければならなかった。次の取付のオーバーハングの右側に行く予定だったが、そこは無理だったので、一番楽な方、すなわちオーバーバンクを少し登り途中で右側にトラバースすることにした。ここを越える時は、もう必死の思いで、恐れ等を感している場合ではなかった。三十分程かかってやっとの思いでスロメートルぐらいの所の少しテラスの様になった所についた。ここを少し休憩を取ることにした。

下の方、源次郎尾根に何時の間にかきたのか、ちょうど真下あたりを一パーティーが順序良く一列になって上って行くのが見えた。上を見るとなお半分程で、そこからはブッシュやハエ松が茂った傾斜のゆるい岩が続いているらしい。十五分程してファイトを出して再度岩を登り出した。横の大きなハエ松を利用して確保してザイルを持ちビレーした、なんだかだんだんザイルが細くなっていくように手に感ぜられた。岩はコケが生えて我々のビブラム底の靴に水分がついて、なかなか思うように足が進まなかった。ここらにきた時十五本用意してきたハーケンがもう二、三本に減っているのに気がついた。ハーケンも節約をしなければならなくなった。いよいよ苦しくなってきた。最後の方では、一度使ったのを抜いて又使うしまつであつた。この様にほうほうのていでやっと岩の頂上に到着した。その時のうれしかったこと……。ブッシュを少し通り越して上の方へ進んで行くと岩屋があつた。二人でそこへ入って昼食を取った。岩の上からどこにも水がにじんできて、下にしずくをたらしていた。わずかであつたが、冷たく、一滴の水であつたが大変うまく感じた。三十分程してハッ峰の稜線目ざして進んで行つたが、思つて山よりも何時までたっても稜線につかず、ちよつとなさけなくなってきた。しかし岩登りで思ひのほか時間をとつたので、ピッチを上げて歩いた。稜線に上がって三ノ窓など四方八方を見わたし地図と見比べて見ると、どうも今いる所は二峰か三峰あたりであることに気が付いた。がっかりしたが、もう二時を回つていたので、剣の頂上に行くのをやめて、五六のゴルからすぐ源次郎を下りることにした。雪渓を急いでグリセードをして下って朝登つた岩を見た。ここを登つたのか、と思ふと、ちよつと今になってゾーとしてきた。六時十五分テントにつく、もう暗くなりかけていた。テントに入って夕食をとり、はやめにシュラフの中へ入った。

— ○ — ○ — ○ — ○ — ○ — ○ —

結果から考へて、この岩登りは失敗であつた。しかしこの岩登りがただ無意味に終つたと言うものではなく、後にこれによつて与えられた何かの色々な形でもってプラスとなり表れてくるなら、けつして失敗と言ひのこすことは出来ない。むしろ成功と言つてもよいだろう。

冬の丸池スキー合宿

高 3 ・ 乾 隆 也

12月22日 晴

大阪午後8時25分発

23日 快晴

丸池着午前9時。11時→2時 4時→5時 方向転回、直かり、の練習。

24日 雲

8時30分→11時、1時30分→3時、斜滑こうと直かりの練習。加瀬井軽い捻挫をする。

25日 雪後晴

9時→11時 2時→4時 斜滑こうと全制動の練習

26日 吹雪

9時→11時迄は全制動回転の練習。昼から初めてリフトにのる。加瀬井も伊藤もこわがって滑っておりられない。練習を終えて帰る途中伊藤捻挫をする。痛みがひどいので志賀高原ホテルの医者へ行く。クルブシの外上側の軟骨骨折との事。ギブスはめてもらう。

27日 小雪

発埔迄ツアーに出る。ブナ平で今迄練習したものを全部戻り3時間程滑る。皆んな慎ちような滑り方である。

28日 晴

7時丸池発。8時30分湯田中、9時30分長野。

29日

6時30分大阪着。

記 録

近 郊 山 行 ・ 六 甲 山

- 35年2月 7日 ---- 芦屋ロックガーデンキャンプ
8日 (安井、小山、永島、乾、三沢、佐藤、竹原)
- " 2月 14日 ---- 芦屋ロックガーデンキャンプ
15日 (永島、乾、三沢、佐藤、川村)
- " 4月 16日 ---- バットレス岩登り
(堀田、安井、竹原、藤原、永島、伊藤、竹原、
三沢、川村、堀田)
- " 4月 23日 ---- 山祭りロックガーデン
24日
- " 7月 14日 ---- 芦屋ロックガーデンキャンプ
17日 (永島、川村、三沢、堀田、南里)
- " 7月 23日 ---- 芦屋ロックガーデンキャンプ
24日 (永島、川村、三沢、堀田、南里)
- " 9月 17日 ---- 芦屋ロックガーデンキャンプ
18日 (永島、川村、三沢、堀田、伊藤、南里、柳)
- " 11月 5日 ---- 雪彦岩登り
6日 (永島、堀田、安井、伊藤)
- " 12月 3日 ---- 芦屋→最高峰(六甲)→逆瀬川
4日 (永島、乾、中川、安井、伊藤、三沢、川村、柳、
堀田、竹原、竹中)

春山

1. まえがき

(高3) 永島孝男

2. 日 誌

(中2) 川村静治

(中1) 南里

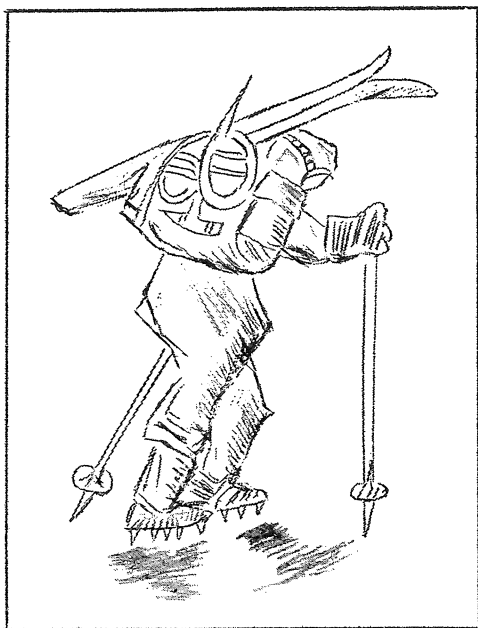
3. 装 備

(中2) 三沢寛也

4. 食 料

(中2) 川村静治

乗鞍岳合宿



TAKAYA.

甲南高等学校 山岳部

＝ まえがき ＝

チーフリーダー・高3・永島 孝男

今年の春山は、現在高校生部員が5人であるが、参加出来るのは私一人で、あとは全員中学生となってしまったので、色々先輩等と話し合った結果、今度の部の活動やその他色々と考えて、中学生を主体に、又中学生とテント生活や活動が共に出来る様に、目的地を色々考えた末、スキーも出来る、楽しめて、春山の気分をも味わえる所、乗鞍に決まった。はじめは中学生半分は、小屋泊りにする予定だったが、人数が少なくなり可能なので、全員テントに入る事になった。天候は、初日からふぶかれて荷物が予定よりもだいぶ重たかったので、冷泉までで一泊することにした。二日目は快晴で、位ヶ原まで行き、その日にテントも張れた。テントに入ってから後はあまり天気が良くなく、ちょうど、二日晴れてくれたので、頂上は全員行くことが出来たが、その他の日は、附近でスキー練習をする程度で、ツアーも一回も行けなかった。が、スキーは必要程度全員滑れる様になり、テント生活により雪になじめて、積雪期の山にある程度慣れることが出来た。食糧の方では、準備した係の者が行けなくなり、その為合宿に行った係との予定がくいちがったので、ち

よって狂ったが、なんとか出来た。装備の方は、だいたいうまく行ったが、特にテントの住み具合を考え、底がへてまないように色々考え、塩化ビニール材を持って行き組み立てて下にひいた。大きいテントの底がいつまでもへてまなかったのも、うまく出来た。以上の様に、まあまあ予定どうりの行動が出来た。実際の活動面では、あまり天候の具合もあり活発に行動することは出来なかったが、又その為には部員全員が苦勞も楽しみも共に出来、又もう一つの大きな成果は、今までの様に高校主体の合宿とは異なっていたので、別々に中・高が行動するということになかった。この様な為には、部員全体が互いにより親密になり、チームワークがとれ、今後の合宿に多く影響するだろう。

＝春季乗鞍合宿＝

人員	堀田美昭(高3)	三沢寛也(中2)	南里	(中1)
	竹原洋爾(〃)	川村静治(〃)		
	武田捷一(〃)	野村 功(〃)	藤田先生	
	永島孝男(高2)	堀田正康(中1)	桑原先生	

3月22日

3時頃から大阪駅で汽車を待って、20時25分発の準急「ちくま」で一路松本へ。志賀高原へ行かれる藤岡先生と一緒にだった。

3月23日(曇のち雪)

松本駅でまっ黒になった安井さんに出会った。足をねんざしてこれから帰るということだった。島々から幸いにも鈴蘭小屋まで入り、そこから又新しく出来たリフトに乗って島居屋根の取付きの手前あたりまで行く。このリフトに乗っている際に猛烈な吹雪になって、とても寒かった。三本滝からバス道のとおりには道を行ったので、いつまであっても小屋が見えず、今日は位ヶ原までは行けないので、冷泉に泊まる事になった。それでも冷泉小屋の前の登りは少しきつい上に、表面が氷になっていたのも苦しかった。

3月24日(快晴)

きのうとは違って変わったよい天気は、おおいに元気づけられて冷泉小屋を出発した。小屋の少し上までアイゼンをつけて行き、そのあとはスキーを

はいた。位ヶ原の小屋で主人が「きのうの晩は晩飯まで用意して待ってたのに」と言っていた。小屋の横の斜面をのぼりきって平らになったところにテントをはることになって、昼のパンを食べたあと、先生を含む全員でテントをはりブロックをつんだ。4時ごろには全部終り、先生が小屋へ帰って行くのを見てからテントに入った。ホエーアスの新品が最初からポンプがつぶれていたの、ラジウスを使うのに手間とりながら晩飯を作った。夜はものすごくきゅうくつだった。

3月25日（曇、吹雪）

アタック

パーティ 堀田、竹原、武田、永島、川村、南里、藤田先生、桑原先生。

8時頃先生が小屋から登ってこられたので、シールをつけて出発した。出発した時は晴間もあったが、肩の小屋に近づくにつれて風も強くなり、視界も悪くなった。宇宙線研究所の石垣の影でアイゼンにはきかえて又登り始めた。この風も頂上の手前の尾根あたりでいくぶん弱くなった。頂上でアメとチョコレートを食べ、写真を取ってから降りた。途中でスキー靴でアイゼンもつけずに登っている人がいた。肩の小屋からテントまでスキーで帰った。

昼からテントのすぐ横でスキーの練習をした。

3月26日（吹雪）

朝からテントの中でトランプ等をしてひまをつぶす。食料を入れてあるバックがテントの中にあるとせまいので雪洞を掘る。昼からスキー練習をした。武田さんのスキーが折れて、野村のスキーのセフティーがいかれてしまった。

3月27日（吹雪）

今日も又吹雪である。はじめのうち天気がよすぎたのか等と考えていた。富士見あたりヘッアーへ行こうかというのもあったが結局今日も沈澱である。昼ごろ先生だけで肩の小屋までツアーに行かれたが、藤田先生はスキーを折って帰ってこられた。砂糖不足のために小屋に砂糖を仕入れに行ってくれたが、桑原先生が砂糖を持って来ておられたので、それをもらってテントに帰る。なおこの時武田さんが一足先に下山した。（中ス 川村送）

3月28日 火曜日 小雪後曇 沈澱

今日は雪が止んだかと思ったが、あい変わらず小雪が降っている。ガスも少ししかかっているようである。

今日も沈澱らしい。朝飯を食べてしまうと、する事がないので退屈である。持ってきた週刊誌は全部読んでしまったし、することという、トランプをするか携帯ラジオを聞くぐらいのものである。雪は止んでいるようである。

午飯からポリコーンを食べてからゼリーを作った。雪は完全に止んでいる。風も全く無いようである。テントの外へ遊びに行った。いつ来たのか知らんが100メートル程先に三、四人用の黄色のウインパー型のテントが張ってあった。25日にスキーの練習をした所は雪が降ったので傾斜がゆるくなっている。敷地に行つた連中は、その傾斜のある尾根の上で写真などを写したり、景色をながめたりしていた。みんなが帰ってきた。そしていつも通りに晩飯を食べてから寝た。明日は晴れそうだ。

3月29日 水曜日 晴 小屋に下る

今日は位ヶ原山荘に下る予定である。

もし雪が降っていたら撤収する予定であつたが、天候もよくなつたし、まだ頂上へ登っていない者もいたので、アタックに行つてから撤収すると思ふことになった。

午前四時半頃起床。朝飯のためのブロックを取りに行つた者が「晴れた」と云つた。見てみると、来た時のような快晴ではないが、アタックに行くには十分だ。アタックに出かけたのは午前9時頃であつた。肩の小屋までスキーを使った。肩の小屋でスキーを脱いでアイゼンにはき換えた。頂上の近くになるにつれて、降った雪は風のために吹き飛ばされていたので、歩き易くなつていた。頂上へ通ずる尾根に出ると、小さかったが雪庇や天ぶらえびのしっぽのような樹氷もできていた。帰りは来た道を引き返すのである。テントに帰つたのは12時頃であつた。テントキーパーの連中が紅茶を作つてくれた。昼食を食べてから撤収にかかった。

3月30日 木曜日 曇 下山。

今日は山をおりる日である。

今日は小雪がパラつきそうな天気だ。しかしみんなは山を下るので張り切っていた。午前6時頃起床、6時半頃小屋で朝食を食べて、7時頃小屋を出発。

曇つたが風は無かつた。ぼくら(三沢、野村)以外はスキーを使った。スキーと云つても重い荷物を背おつてするのであるから、ゲレンデのようにうまくいかないようである。冷泉小屋を下つてから全買スキーを脱いで歩くことになった。下るにつれて天気はよくなつていた。スキー場のリフトの上の近くの附近でスキーを使って、この合宿最後のスキーを楽しんだ。鈴蘭小屋で御飯を食べて次のバスに乗るまで休んだ。バスは島々までしかいかないはずであつたが、特別に松本駅まで行くことになった。松本市内で大学の山岳部の人達と出会つた。

(中ノ、南里記)

春山装備一覧表

品 名	数	備 考
テント	1	かまぼこ 8人用
ホエーブス	2	新しい方のポンプ不良 No.625
なべ	6	ゴッフアー
のこぎり	2	折りたたみをして持って行く
缶 丁	2	鉄とステンレス
ガソリン	20ℓ	
ローソク	16本	8本使用
テント下じき	1組	
スコップ	1	大型、竹原さんの家の使用
スキー修理用具	1	ペンチ、くぎ、ねじまわし、ブリキ、かなづち
お玉じゃくし	2	
竹ブラシ	2	
ランタン	1	
輪 かん	3	使用せず
茶こし	2	プラスチック製

＝春季装備後記＝

中2 三沢 寛也

ラジューズ（ホエーブス）

No. 625を出発前に買ったが使用の段になるとポンプのこじようが発見され、後少々不便を感じた。しかし出発当日に買ったので使用するこじが出来ずだからこれは手落だった。

のこぎり

こんど折りたたみのノコギリを1つ買った。持運びの点、使用上の点でもよかった。ねだんもふつうの物とかわらない。

缶 丁

鉄のとステンレスノつずつ使用したが、鉄の方は4日頃にはさびが始まりました。ステンレスは軽くさびないので、この方がよかった。

テント下じき

これは合成じゆしで出来ているプラスチックの様な物をあみ合せて組み立てるものだ、運送のはあいもスキーと同長なので、あいだにはさむとたい不便でもない、テントのしずみもほぼこれで解決できた。しかし欠点は、おれるともうかたがなおらず、非常におれやすくなる。

スコップ

大型を一つ持っていったが、えが折れてしまい、ブロック切りに不便を感じた。

スキー修理用具

ますますだったが、くぎを少ししか持っていかず、修理の時にはこまった。

＝春山食料計画＝

中2 川村 静治

(主食)

米	6 升
モチ	60 個
フランスパン	80 個
食パン	30 山
カンパン	50 袋

(調味料)

み せ	500g
しょう油	0.8ℓ
ソース	0.8ℓ
砂糖	6 斤
コショウ	2
味の素	2
塩	1 袋
ケチャップ	3

(肉 類)

牛 肉	700g
ソーセージ	30 本
ハ ム	2 本
チーズ	48 個
バター	2P

(野菜)

王ねぎ	20 個
ジャガイモ	20 個
ニンジン	4 本
ネ ギ	8 束
大 根	5 本
ホウレン草	10 束

(その他)

マカロニ	12 袋
わかめ	1 袋
せん切り	3 袋
カレールウ	2
ジャム	10 個
ママレード	10 個
紅 茶	2 袋
チョコレート	5 枚
ウイスキー	1 びん
ア ヌ	5 袋
ゼライス	2 箱
ポップコーン	5 箱
チキンラーメン	10 袋
かんぞううどん	5 袋

＝春山合宿食糧反省＝

川村 静 治

こんどの合宿では、計画から買い出しまで全部乾さんにやってもらったので、主に皆からの不満を書くことにします。

まず昼ですが、今回は今までなかった食パンが大分入っていましたが、フランスパンよりよかったのではないかと思います。しかし、どちらにせよ、じきかびがはえてくるのに変りがないので、先食べてしまうのがよいと思います。又ジャム等ですが、チーズ、ソーセージは大体よかったのですが、ジャムはもう少しあったほうが良かったと思います。

次に、もちとみそ汁は簡単に作れておいしかったのでよかったのですが、ウドンとミソ汁は全燃だめで、夏山同様どんぞになってしまって食べられませんでした。おじやはこれ又うまく行かず、2回目は計画変更して、ごはんと汁とを別に作って食べました。

晩の方では、マカロニは一応うまく出来ましたか、もう一つ食べどをえがなかつたようです。これはマカロニに野菜とハムとを入れてケチャップで味をつけただけなのですが、ほかにも食べかたはあると思います。カレーは、カレールウがたならなくて、1回で2回分を使いましたが、それでも少し水くさかつたようです。こんなことがないように、これからはカレールウのほかは、カレー粉とメリケン粉位持ってゆけば良いと思います。このために、カレーの予定のところは、堀田さんが持って来ていた塩ジャケを焼いて食べました、今度からこのように、ちよつとかわった物も持って行くと良いと思います。

最後に嗜好品等ですが、ポップコーンは大変よろこばれたようです。アメもあれ位あれば十分であつたと思います。しかしゼライスは、割と手数がかかるわりには喜ばれなかつたようです。もっとも不足したのが砂糖ですが、これはみんながちゃんと一斤ずつ持って来てくれればたりたと思います。

今度の合宿のように、計画した人が合宿に参加していなかつたので、いろいろ手間取りましたが、今度からこのような時は、計画した人にくわしく説明してもらって食事を作りたいと思います。

以上。

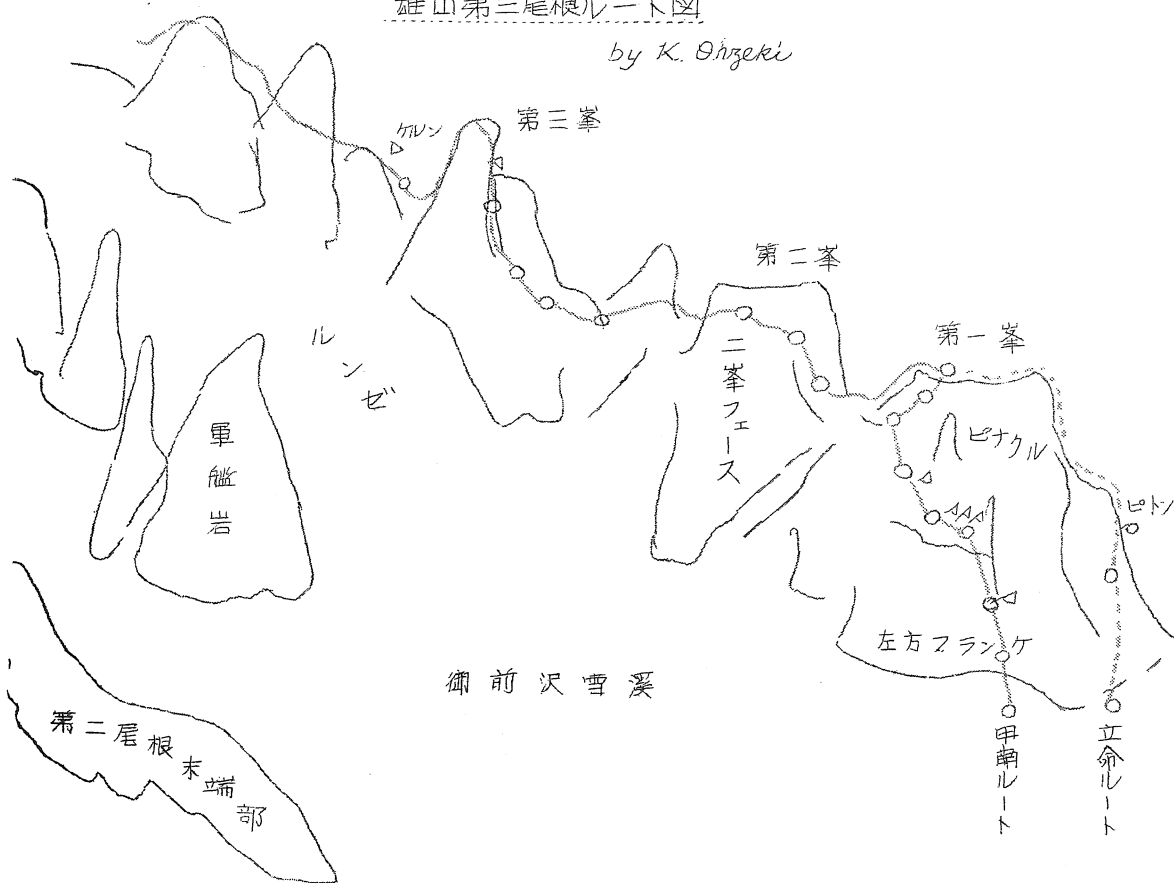
立山東面の岩場

経3 大関 和夫

経2 飯田 進

雄山第三尾根ルート図

by K. Ohzeki



立山は古くから富士山、白山と並んで信仰登山の聖地とされ、近年はケーブルカー、バスによって大衆登山のメッカとされている。しかしこの立山も弥陀原や頂上雄山神社のにぎわいをよそにその東面(黒部側)は訪れる人も少ない。東西どちらから入るルートも二千六七百メートルの山を越さねばならないアプローチ。又近くに剣岳という岩の殿堂があつては、あまりかえりみられなかったのは当然であらう。34年7月、内蔵助平からこの立山へ入り、偵察、竜王東尾根で岩登りをしてみて、標識的な美しいカール、静かな岩場、スケールはあまりないが、まだここには自分の目で見て、自分でルートを開いて岩登りができることなうれしかった。今年の夏山の前期に、中堅部員を中心に、二回目の立山東面へ入り、色々得るところもあつたので、立山東面について少し書いてみたい。立山東面の岩場は主に花崗片麻岩からなり、ビブラム底がきいてすばらしい岩肌を成している。その規模は小さく、偏在してはいるがすっきりとした岩場である。戦前に登られた、竜王岳東尾根をのぞくと、ここ数年の立命大、京大の二三のパーティによる記録しかなく、立山東面の岩場はまだ開拓期にあるが、秋の紅葉の頃に、登山スキーの余暇に、岩登りの軽いトレーニングに、高校山岳部あたりの夏の合宿地にこの立山の岩場を紹介してみよう。

竜王岳東尾根

1930年京大の永島吉太郎氏により、初登が成されたこの尾根は、岳人99号に紹介され立山東面の岩場では最もポピュラーなものであらう。一の越に立つと南に大きな岩尾根が目につくだろう。浄土山の端に突出する竜王岳から御山沢カールに向つて派生する尾根である。標高差約400m。主稜は下から一峯二峯三峯と階段上に上っているが、尾根伝いの登りは別にこれといった難場もなく、ザイルをつけなくてよい様なところであるが、大体この尾根はその側壁のルートを混えて登るとおもしろい。取付から頂上まで2-3時間の軽い岩登りである。以下は主なルートの登攀メモである。

① 第一峯東面フェース

尾根の末端にあたる約40メートルのスラブである。30m3人のパーティで3ピッチの短いもので容易なルートである。

② 第一峯北面フェース

ホールド、テラスは富んだ約50メートルのフェースである。フェース直下のバンドでアンサイレソして取付く。ルートとしては中央のスラブを登るのと右のロンゼを登るのがあるが、前者はバランスを要求されて、少し困難であ

る。

③ 第二峯北面フェース

フェースの下部はハイ松が多いが、中央部を登ると割におもしろいルートだとれる。

④ 第三峯北面フェース

ダイレクトに竜王岳頂上へ登るルートであるが、一の越からみた程の垂直な壁でなく、約100mのフェースであるが、ほとんど高度感を感じない。30mス人パーティで5ピッチ、リッジとフェースクライミングを交互にやるやさしい岩登りである。穂高のジャンダルム飛騨尾根級で、ロックガーデンならブラックというところ。以上の北面、東面のフェースに取付くには、一の越から御山沢カールへ下り、雪渓を横切っていくと良い。

<参考記録>

第一峯東面フェースから竜王岳へ

59年8月1日(大関、森本、牧野)

一の越(7.20)取付(7.30)二峯(8.20)竜王岳(9.00)

⑤ 竜王岳東尾根南面の岩場

北面、東面は比較的傾斜はゆるく、登攀を容易であるが、その南面は急傾斜で切れ落ちており、登攀は相当困難のようである。南面については、俣察から割出したものであって、ではないだろうかを一歩も出るものではないが三峯南面、すなわち竜王岳南壁といえる130m位の垂直な壁や高度差300m位の細い岩稜の南稜等相当手強そうなルートがある。なお一二峯南面のフェースはルートが開かれているようであるが、まだ登っていないので、何とも云えぬが、困難なルートだと思う。

鬼が岳東尾根

御山沢カールのもう一つの岩場として、鬼が岳の二本の岩稜を考えていたが、見たところ傾斜はかなりゆるく、登攀の対象にはならないと思うが、ナイフリッジや岩塔のようなものが多いようだ。又獅子岳から派出している尾根は問題にならない。これらの尾根は5万分の1の立山の地図には大きく表わされているが、小さいものである。

雄山東面の岩場

御前沢カールの岩場としては、南から東一の越尾根、雄山第一尾根、第二尾根、第三尾根、中央山稜があるが、東一の越尾根(268m尾根)中央山

稜の主稜は悪雪期には登攀価値はない。雄山東面の岩場に取付くには、雄山神社の南、方位標のあるところから東へ越尾根を十分程下り、御前谷雪溪をグリセードで下降する。御前谷はすばらしい圈谷で、夏スキーも楽しめるような広い雪溪である。

雄山第一尾根

雄山頂上の北から御前沢へダイレクトに落ち込んでいるが、その末端は二つに分れ岩はもろそうで、あまり登る気になれない岩尾根である。雄山の三つの尾根では一番小さく、今回は取付かなかった。下半部はガレの様なもろい岩でブッシュも少しついているが、上半部は、すっきりした岩稜でナイフリッジの様にもみえる。

第二尾根

第二尾根はスケールも小さく、として時間のかからない平凡な尾根である。北面はどこからでも取付いて登れそうであるが、南面は急で、岩ももろく草付きが多い様であり、登攀は北面に比して困難なものとなるだろう。

雄山より南に向って出ている、東へ越尾根を少し下って、御前沢に向い、ぐんぐんと下って行くと、第三尾根の大きな岩壁に対峙して、末端をハエ松におおわれながら、次第に岩面を露出している。第二尾根の末端に着く。この御前沢は、クレバスも少く、グリセードを楽しむものにもって来いの場所である。さて第二尾根を末端から行くと、ハエ松に悩まされスケールもなく、面白い所ではないので、少し雪溪を上って、ハエ松がまばらになった所より登り出す。20～25米位の高さの岩場を二つ程越すと尾根筋に出る。尾根上は広く、段々状になっており、上に行くにつれて岩場を呈してくる。尾根の中途位の所に来ると、右側の雪溪がすぐ下に迫り、左側は急峻なルンゼがせりよって、左右が合しており、尾根が一たん切断された様になっている。リヤクダツ点と云われる様なものではないが、対面の尾根との間が一米位間をあけている。合致点はそんなに深くなく、せいぜい4m位であろう。ここで対面に行く為、雪溪(右側)に一度下ってから、再び尾根に側壁から取付いてもよいわけであるが、我々は、この切断点を飛び越えて対面の岩に取付いた。この取付点は少しハングっており、左へ行き過ぎると、モロイ岩になるので、なるべく右よりに取付いて、ハエ松がグッとハミ出している、小さなハングを乗り越えた。この箇所はピトンを一発使用したい所であり、その方が安全であるので、我々も使用した。後は広い尾根上をてくてく歩いて行く

と、右手に軍艦の様な型をした岩峰に出て来る所で尾根が消えて、上は雪溪になり、再び主稜線より小さな数々の尾根が出ている。我々はここで軍艦型の岩峰の左から数えて二つめ（軍艦型の岩峰は含めない）の尾根をたどって主稜線に出た。この附近は、数多く小さな尾根が派出しているので、どれを取ってみても皆登って行けると思われるし、右にトラバースして行けば、第三尾根の左下に行けると思われ、乙の間に適当に主稜線に出るルートを、取る事が出来ると思われる。

（飯田 進・記）

第三尾根

立山東面の岩場としては一番大きく、この第三尾根ならば、剣の岩場とあまり変らぬスケールがある。一、二、三峯と大次峯まで連なるすばらしい岩稜である。各峯のレンゼには残雪が深くくい込み、各峯は小さいながらもすっきりとしたフェースを持ち仲々おもしろいルートである。特に第一峯は高距130m東面唯一のフランケを持ち、京大報告7号にも「第三尾根の第一峯フェースは相当大きく十分登攀の対象となると思う。」と書かれている。この尾根は1956年7月28日、立命大の高桑進次、島田富士弥両氏により、尾根通しのルートが開かれている（後述立命大のルート）。又、59年11月5日、京大の大竹、高橋両氏により積雪期のための偵察が行われ、翌60年3月23日と25日の両日、アタックを試みられたが、失敗している（ルートは立命大のルート）、この尾根の立命大のルートと今年の合宿の記録を登攀メモとして書いてみよう。

① 立命館大のルート 56年7月25日

立命大山岳部（高桑、島田）

大体リッジ通しのルートである。尾根の末端は90に直立しているので、左寄に30m登ったところでアンザイレン。狭いバンドに頭をおさえられながらリッジへ出るトラバースから始まる。ハーケンを打ちアブミを使ってトップは左稜線に攀越せば、あとは快適なワンアットタイムで一峯頂上へ出られる。

参考記録（暮雪（立命大報告17号ヨリ））

取付（11.00） 一峯上（12.50）

② 甲南のルート 60年7月17日

甲南大山岳部（大関、森下）

立山東面の岩場は大体その南面にある壁は傾斜は強く、北面はゆるい。二

の事は第三尾根にも云える。その南面すなわち左方フランクは垂直に高距
130mほどもある壁である。立命大はリッヂ通しのルートを開いておられ
るので、この左方フランクにルートを求める。中央にあるスラブから取付く、
ところどころにハイ松を混えたバンドがあり、上部に見えるピナクルを目標
に登ることにする。8ピッチ、使用ハーケン5本で一峯の左よりの頂上へ。
尾根は相当に細。コンティニアスで二峯へ、二峯はもろい岩峯で、二ピッチ
で乗越す。二峯上には残雪が残っていた。第三峯は、この尾根ではおもしろ
い所である。一ピッチはスラブから取付き、中央のクラックに入ると、上部
はハング気味でピトンをきかせて乗越す。三峯のコルで、ケルンを積んで、
霧の出てきた縦走路に出る。

参考記録

取付(9.40) 一峯(12.45) 二峯(1.05) 三峯(1.55)
縦走路(2.05) 雄山(2.25)

その他の御前沢の岩場

中央山稜の御前沢側の壁は高距200m位のフェースで仲たりっぱである。
又、小槍の様な岩塔もあるが、これは第三尾根から見た感じであるので、確
言はできないが登って見たらおもしろいのではなからうか。又第三尾根と第
二尾根の間にある軍艦岩も又その附近の針峯もスケールは少ないがおもしろ
そうだった。

————— X ————— X ————— X —————

以前、ある山岳雑誌に「大町側のトンネル(黒田の大町トンネル)がで
きると、御前沢は涸沢みたいになる。トンネルができれば、立山東面の壁へ
夜行でたつと、午前中に行ける涸沢よりも簡単に入れる。」という記事をよん
だことがある。大町トンネルによって、この立山東面を含む黒部一帯が一大
観光地となる日も近いことであろう。黒部の谷に作られた人口湖の遊覧船に
でも乗ってこの立山東面の岩をながめる日もそう遠くはあるまい。そうなっ
ても恐しむにあたらない。このせまい日本の山だって、人のあまり来ない静
かなところを又さがし出せば良いのだ。この立山東面については、最近二三
の書籍でその岩場が紹介されるようになったし、又、あるテレビの劇で竜王
乗尾根の岩を登るカットが出て来たのを見たことがある。この立山東面もま
だまだ人の訪れる機会も少ないであろうから、軽い岩登りをやりて又訪れて
みたいと思っている。

記 録

〔5月新人強化合宿〕

場所 鹿島槍ヶ岳東面（西候沢出合B.C.）

期間 昭和35年4月28日—5月5日

参加

L	倉藤 孝次	E3
SL	大関 和男	E3
M	柏木 宏文	E3
	伊藤久三郎	E4
	広瀬 健三	E4
	藤安 賢一	E4
	岡田	B2
	小松 史明	S2
	鶴木 洋	L2
	二谷 和成	E2
	飯田 進	E2
	村上与利一	B1
	長谷川恵一	B1
	武田 雄三	E1
	上田 譲	B1
	後藤 洋	L1
	福田 信三	S1

4月28日 大谷発20:10
(新潟行)

4月29日 曇後晴

大町よりトラックにて大谷原迄行く。朝の内曇っていたが、次第に晴れてくる。25分ピッチで行動する。3ピッチ目に、倉藤、広瀬、

藤安の三人テント地帯の極先に行く。西候出合辺より雪が有り、西候出合より雪渓となる。西候沢出合にテント設置。

大町発(7:15)—大谷原(8:10)—冷沢(8:40)—西候沢出合(10:15)

4月30日 曇

a. 東尾根アタック

大関、藤安、森本、鶴木、小松、BC(5:00) 三ノ沢出合(5:35) 東尾根(7:00) 第一岩峰(8:45) 第二岩峰(10:30) 北槍(11:30) 三ノ沢出合(12:50) BC(13:10)

b. 鎌尾根アタック

倉藤、二谷、岡田、飯田。

気温30℃(午前5時)、三ノ沢出合で東尾根アタックのパーティと分れ布引沢に入る。沢を少し登ってから鎌尾根第一ナイフリッジに向う。雪はよく締まりアイゼンが良くきいて快適である。国境稜線に出る時、3m程の雪庇に出合

ラ。トレースの跡はなく、ヒツケルス本を使用して東越す。南槍と北槍の中間で東尾根隊と合流し、共に北俣本谷を下る。

出発(5:00) 三ノ沢出合(5:35) 尾根トツツキ(6:55) 第一ナイフリッジ(7:15) 国境稜線(9:15) 南槍(10:00) BC(13:25)

c. 雪上訓練

広瀬、伊藤、以下一年全員
西俣沢出合より少し登った所で、スリッパストッピング、グリーセード等の訓練をする。

出発(7:00) 練習開始(7:40) BC(12:00)

d. テントキーパー

柏木

5月1日 曇

天気悪し、30℃(5時)、前日夕方より降り出した雨は今日3時には止んでいたが、天気は非常に悪くアタックは中止する。11時頃より三ノ沢出合でグリーセードの練習を行う。この日小川先輩が訪ねて来られた。

練習開始(11:00) BC(13:10)

5月2日 曇後雨

沈黙 5時頃より雨が降り出す。

5月3日

a. 東尾根

倉藤、二谷、飯田、

荒沢奥壁を見んとて三ノ沢をぐんぐん登る。第一岩峰はハエ松をつかんで強行に登る。荒沢奥壁のすばらしい眺めが目に入る。第2岩峰で1時間も待たされる。天狗尾根に登る他のパーティを見ながら北峰に向う。連休の事とて多勢の人達が集っていた。帰路は北俣本谷を下る。前日降った雨は上の方は雪になり、5寸位は降ったと思われる。雪崩を恐れながら一気にシリセードで下る。

出発(5:15) 三ノ沢出合(5:45) 第一岩峰(7:30) 第2岩峰(8:30) 北槍(10:30) 三ノ沢出合(11:20) BC(11:35)

b. 赤岩尾根

伊藤、小松、村上、長谷川、後藤、

全員元気に登る。稜線に出てからは南槍に向い、鎌尾根隊と合流して布引沢を下る。柏木途中で調子悪く引帰す。

c. 鎌尾根

大関、森本、鶴木、上田、福田、武田、

紀行文参照の事

d. ダイレクト尾根

藤安、広瀬

雪はザラメの上に新雪が一尺程積っている。別にとりたてて云う程の尾根ではないが、途中難しい所がヶ所有るが、大した事はなかった。

出発(5:20) トツツキルンゼ
(7:30) 稜線上(8:10)
南槍(8:50) BC(12:25)

5月4日 曇

a. 東尾根

倉藤、岡田、以下一軍全員
紀行文参照の事

b. ダイレクト尾根

大関、森本、二谷、小松、鶴木、飯田
紀行文参照の事

c. ライトキーパー 柏木

伊藤、藤安下山して兼葭へ。
広瀬帰阪の為下山。

d. アタックが午前中に終わったので、
午後撤収する事にきまる。大谷原
で車を拾えず故に事15分。後より
三輪トラックが走って来たので
全員これに乗せてもらい鹿島部落
迄車上の人となる。

撤収(13:00) 冷沢出合(13:35)
大谷原(13:45)

〔夏山定着合宿〕

1. 立山東面

2. 剣岳東面

参加

CL	倉藤 淳次	経3
SL	大関 和夫	経3
	伊藤久三郎	経4
	牧野 宏	経4
	森本 全彦	法2
	鶴木 洋	文2
	二谷 和成	経2
	飯田 進	経2
	福田 信三	理1
	武田 雄三	経1
	高津 克敏	経1
	村上与利一	経管1

長谷川恵一 経管1

上田 義 経管1

夏期合宿は前半の定着合宿を二つに分け、一つは上級部員による立山東面の岩登りを、一つは剣二候にテントを設け、剣岳東面の尾根と岩場を対象に合宿を行い、後立山東面のパーティが二候に合流し、全員で合宿を行った後、後半の分散合宿。即ち剣より笠ヶ岳方面、針ノ木蔵えと池ノ平に定着して岩登りの三つに別れた。合宿中は前半好天に恵まれ、充分満足であったが、後半は天候悪く毎日の様に雨が降り思う様にならなかったの

は、残念であった。

夏山合宿 前半行動表

日誌

7月14日 曇後雨

朝からどんよりと曇って今にも降り出しそうな天気である。どの辺で降るだろうと思っていたら、雄山荘辺で降り出した。あまりきつい雨でもないが、ぱっぱしな入山であった。

富山 (5:25) 千寿ヶ原 (7:00) 美女平 (8:20) 逗分 (9:10) 水飲場 (10:30) 雄山荘 (11:50) 雷鳥荘 (13:00)

7月15日 小雨後曇

今日はボツカである。逗分までは雨中を、帰りは曇り空を仰いで帰った。天気は悪かったが、炎天の中より今日の様な天気の方が疲れが少なげな気がする。

雷鳥 (8:00) 逗分 (9:35) 逗分発 (10:00) 雷鳥荘 (12:45)

7月16日 晴

今日から、しばらく一年とお分れて、東立東面にゆく。
二俣隊を見送ってから、一ノ越に向って出発する。立山と室堂の間を流れる小川を渡り、立山の麓を横切っ

て行く。一ノ越より20分位下った雄山沢にテントを設ける。竜王乗尾根がすぐ目の前にある。午前中に着いたので、午後は竜王乗尾根三峰に登る。

大間、牧野、二谷、森本、飯田、
(立山乗道岩場参照)

◎ 例の雪鳥沢の登りに全員い々バテ気味で、剋御前に着く、ここで茶を飲んで解決へ。二年生一人ここでおかれる。長次郎出合で昼食を喰ってから真砂沢出合で小休止。このあたりより一主生半数は二股に着くまで非常に苦しうであつた。二股で例の場所にテント設置。

雪鳥沢 () — 剋御前 ()
— 長次郎出合 () —
真砂沢 () — 二股 ()

7月17日 晴

a. 雄山第2尾根
牧野、飯田、二谷。

b. 雄山第3尾根

大間、森本、

(立山東面岩場参照)

◎ 全員グリーセード練習の後、三ノ窓コルへ上る。

BC (8:15) 練習開始 (9:30)
三ノ窓 (11:25) BC (13:25)

7月18日 晴時々曇

a. 竜王東尾根2峰、

森本、二谷、牧野

b. 竜王東尾根3峰

大関、飯田

(立山東面岩場参照)

◎a. 八峰上半

7月19日 晴

今日より蔵之助谷へ入る予定で出発したが、富士の折立の雪渓を下るのに荷が重過ぎたため、蔵之助はあきらめて、二俣へ入る事にする。二俣では全員元気に迎えてくれ楽しかった。

一ノ蔵(8:50) 蛭山(9:50)

富士、折立(10:45) 御前(

12:35) 二俣(16:00)

◎a. 八峰六峰Cフェース

倉藤、長谷川、

東面の明るい岩場であり、快適なクライミングを行う。

BC(6:30) トツツキ(9:

50) ピーク(10:30) 三

ノ蔵(12:00) BC(12:35)

◎b. 八峰下半

鶴木、竹田、村上、上田、桶田、

BC(6:30) 1、スルンゼ(

8:30) 5峰頂上(11:35)

BC(13:00)

テントキーパー

伊藤、高津

7月20日 快晴

入山以来毎日行動をしているので、今日は疲れを取る為沈黙する。全員集結したので、皆賑やかに談笑して一日を過ごす。

7月21日 晴

a. 大窓小窓縦走

倉藤、二谷、武田、長谷川、

BC(5:30) 小黒部谷(7:

40) 大窓(8:40) 池ノ平

山頂(12:00) 小窓(13:

00) BC(14:00)

b. 小窓、三ノ窓、ジャンダルムA、

Bクラック、

大関、森本、桶田、上田、

c. 大窓隊サポート 池ノ平山小窓

飯田、高津、村上、

テントキーパーと大窓隊のサポートを兼ねて池ノ平山より小窓を越える。池ノ平山より大窓隊と合流。

BC(6:50) 池ノ平小屋(8:

50) 池ノ平山頂(10:15)

小窓(13:00) BC(14:00)

7月22日 快晴

a. チンネ左横線

倉藤、鶴木、鋭の岩場参照の事、

b. チンネ中央チムニー Aバンド

Bクラック

森本、武田、

トツツキ(9:30) Gチムニ

ー(10:10) 頂上(11:30)

c. ジャンダルム、Aクラック

大関、二谷、高津、

d. ジャンダルム、Bクラック

飯田、村上、上田。
Aクラックのパーティと平行して
登る。

三ノ窓コル(8:30) P1(
10:40) P2(11:30)

三ノ窓コル(12:30) B C
(13:25)

7月23日 曇後小雨
沈 澱

夏山縦走行動表

班	鋺、笠ヶ岳縦走	鋺、針ノ木縦走	鋺、池ノ谷定着
参 加	大関、二谷、渾田、武田	飯田、村上、高津	倉藤、森本、瀧木、上田、長谷川
7月24日	二 股 雷鳥沢 一ノ越	二 股 一ノ越	二 股
25日	一ノ越 五 色	雷鳥沢 一ノ越 五 色	鋺 二 股 池ノ谷 二 股
26日	五 色 越中沢岳 間 山	五 色	沈 澱
27日	間 山 薬師岳 太郎兵衛平	五 色 平	池ノ谷左股及び 鋺尾根偵察
28日	太郎兵衛平 上ノ岳 黒部五郎岳	東沢偵察 (平より)	沈 澱
29日	黒部五郎岳 三俣蓮華岳 双 六	平 針ノ木峠 大 出	沈 澱
30日	双 六 クリヤ谷		鋺尾根上半
31日	クリヤ谷 宝温泉		中央ルンゼ左候偵察
1 日			二 股 馬場島
2 日			馬場島 上 市

〔夏期池ノ谷合宿〕

Member

CL 倉藤 孝次 (E3)
SL 森本 全彦 (J2)
SL 鶴木 洋 (L2)
長谷川 恵一 (B1)
上田 兼 (B1)

7月25日(月) ①●

越田氏池ノ谷合宿不参加の由わざわざ二股迄云いに来る。本日7:00アツハラに向って下山。他5名池ノ谷二侯に向って出発。

7:15(テント)ー9:45(ニノ窓コル)ー2:15(池ノ谷二侯)三ノ窓雪溪谷自8貫騎。

コルよりDepoの荷物を加え2年以上はノノカン位となる。池ノ谷左侯の途中より雨に降られピシヤンコになる。左侯右侯の出会の台地にテント設置。

7月26日(火) ①●

池ノ谷左侯偵察の予定であったが、ガス後雨の為泥濘と決め、テント内にて雑談にふける。

7月27日(水) ①◎●

池ノ谷左侯ルンゼ10~1迄と小窓尾根側壁の偵察に出かけるが、左侯ガレー下より雨に成る。その為早々にテントに帰る。

8:30(テント)ー9:30(左侯ガレー下)ー1:00
11:00(テント)

7月28日(木) ①●ガス

池ノ谷右侯より早目尾根に上り鋸尾根偵察と決め、天気悪く泥濘と泥め、立命館の遺体捜査に協力する由伝えるがメンバー多いとの事。今日もテント内で泥濘。

7月29日(金) ●

一面ガス、視界0。小雨からドシヤ降りに変る。早目、小窓の雨サイドより滝の様に水が落ちている。すばらしきながめである。

7月30日(土) ①◎●

鋸尾根上半部アタック(倉藤、森本、鶴木)

7:00(テント)ー8:15(R2取付)ー8:30ー10:00(鋸尾根頭)ー11:00ー11:45(三ノ窓コル)ー12:35(テント)
15時より雨。

時間記録

8:05(テント)ー9:05(取付)ー10:35(三峯P)ー11:10(前穂頂上) 昼食 12:00ー13:00(奥穂頂上) ^{ヒル} 14:30(穂高小屋)ー15:30(テント葎)

7月31日(日) ①②

剣尾根下半、及び右俣、中央ルンゼ、 α ルンゼ、取付及び状態偵察。

8月7日(月) ①

馬場島に向って下山。

8:00(テント)ー9:00(小窓
尾根P)ー12:00(馬場島)

8月2日(火) ①

馬場島より上市へ。

以上、倉橋記。

[九月奥又白岩登り合宿]

参加

越田 和男 理4

森本 全彦 法2

鶴木 洋 文2

9月5日 雨

上高地(8:30) 松高ルンゼ下
(12:30)

9月6日 晴微曇

松高ルンゼ下(6:50) 又白池
(9:15)

千后、越田、鶴木C沢及び、四峯
取付き偵察に出る。

9月7日 雨

荒瀬

9月8日

前穂高岳東面、北壁よりAフェー
ス

(穂高の岩場参照の事)

9月9日 曇(ガス)

荒瀬

9月10日 晴

前穂高岳東面、四峯甲南ルート
穂高の岩場参照の事

9月11日 雨

撤収 上高地へ

[11月の白山(杉峠越え)]

参加

越田 和男 理4

藤安 賢一 経4

飯田 雄 経2

長谷川恵一 経3

期間

11月25日~11月28日

わずかな期間を利用して山へ行こうという話が出され、いろいろと行きたい山をさがしたが、結局加賀の白山へ行く事にした。日数が限られているので、天候に恵まれない限り頂上は踏めないだろうと思いついても、期待を持って行っただ、ついに天候には恵まれず、その上、白峰、市ノ瀬の間を車で行く計画も、その日はタクシー返出払って一台もなく市ノ瀬まで歩いた為、半日の損をしてしまい、ついに頂上へは行けなかった。結局は温泉から温泉へと疲れ歩き、ツンゲル的な山行を為し雪の中を歩き続けただけだった。

日誌

11月26日 雨

朝から雨は休みなく降り続けている。白峰でバスを下車してから、市ノ瀬行きの車を探したが見当らず、仕方なく市ノ瀬迄歩く事にした。市ノ瀬には永井旅館に止まる。夕方川原の温泉に入るがあまりぬるくて、一時間位湯に入っていたが、我慢出来ず、ふるえながら上がる。雨はまだ降っていた。

西金沢(5:05) 白山下(7:00) 白峰(9:00) 市ノ瀬(13:30)

11月27日 雪

前日の雨は夜半より雪になったらしく、一面雪景色である。かなり降ったらしく一尺位は積っていた。雪はどんどん降り続き止みそうもないので、白山は中止する事にする。色々と相談の末、杉峠を越えて鳩ヶ湯へ行く事にする。途中山崎の羽音に驚かされながら雪の中を歩き続け、小池部落を通過して鳩ヶ湯に出た。鳩ヶ湯には温泉もなく、風呂もなかった。

市ノ瀬(9:12) 三ノ谷(9:35) 杉峠(13:20) 小池部落(15:30) 鳩ヶ湯(16:50)

11月28日 雪

今日も雪は降っている。地元の人々の話では1ヶ月早い雪だそうである。中村口よりバスで大野へ。この辺にも汽車が入る様になるそうで、工事の最中であつた。

鳩ヶ湯(8:45) 中村口(9:30) 大野(10:55) 福井(11:30)

〔秋山穂高集中合宿〕

参加

L	越田 和男	理 4	} 千丈沢より 涸沢
	森本 全彦	法 2	
	二谷 和成	経 2	
	武田 雄三	経 1	
L	広瀬 健三	経 4	} 西穂高より 涸沢
	藤安 賢一	経 4	
L	大隅 和夫	経 3	} 常念岳より 涸沢
	伊藤 久三郎	経 4	
	榎本 洋	文 2	
	長谷川 恵一	経営 1	
	有田		
L	倉藤 孝次	経 3	} 上高地より 涸沢
	飯田 進	経 2	
	上田 義	経営 1	
	村上 与利一	経営 1	
	高津 克敏	経 1	

後藤 洋 文 1

M 柏木 宏文 経 4

秋山合宿は四つのパーティに分れ、各々千丈沢より槍ヶ岳、北穂高岳を経て涸沢へ、常念岳を越え横尾より涸沢へ、西穂高岳、奥穂高岳を経て涸沢へ。もう一つは冬山の荷物を上高地迄上げて後涸沢へ入り、その後涸沢に全員集結し岩登りを行った。涸沢に於て岩登りを終し午後、各々帰路を別に取リ、大半は横尾より上高地へ、後は常念より曇々、徳本峠を越えて島々へ帰るパーティに分れた。この様な合宿を行ったので、記録をまとめにくく、ここに行動表を上げますから、参考にして下さい。

秋山合宿行動表

A. 上高地より涸沢

10月15日 晴

冬山の荷物を横尾迄上げるつもりでいたが、小屋の方の都合がつかず、上高地に置く事にする。横尾にテント設営。

上高地 (9:15) 明神小屋 (

10:05) 徳沢園 (11:05)

横尾小屋 (13:30)

10月16日 曇

ガスがかかって、穂高は見えない。

12時半頃、西穂より来た広瀬、藤安が涸沢に着く。

横尾 (8:05) 涸沢 (11:32)

10月17日 雨

沈 澱

10月18日 晴

a. 北穂高岳東稜

前日の雨は上の方が雪になって
いたらしく、少し白くなっている。
岩には氷が付いていて登りにくい
状態である。奥穂小屋で北尾根隊
と合流しザイテングラードを下る。
下の方で常念より来た、大関等が
迎えに来ていた。大関ら入山。

倉藤、飯田、高津、

BC(6:32) ゴルジュ(7:
00) キレット上部(8:15)
北穂北峰(9:30) 穂高山荘
(10:17) BC(13:30)

b. 前穂高北尾根

玄瀧、藤安、上田、村上

5、6のコルをつめて行く。薄
氷のはった岩場になやまされな
がら登る。三峯でサイルを付ける。
槍ヶ岳方面もよく見えて快適であ
った。

c. 十丈より越田等が入る。

10月19日 晴

a. 前穂高三峯フェース

倉藤、鶴木、

(穂高の岩場参照の事)

b. ジャンダルム飛騨尾根

c. 右岸稜登(ハンゲ下まで)

10月20日 晴

a. 前穂高東壁 四峯明大ルート

越田、長谷川、

b. 前穂高東壁 四峯登高会

倉藤、鶴木(穂高の岩場参照)

c. ロバの耳

飯田、上田

涸沢(7:30) 奥穂(9:35)

ロバの耳(10:00) 涸沢(

11:30)

d. 北穂高東稜

大関、鶴木

この日昼過ぎに全員アタックを終
了。2時過ぎ涸沢を撤収して横尾に
下る。

涸沢(2:15) 横尾(3:35)

10月21日 晴

鶴木、森本、有田、村上、長谷川
を横尾に残して他は上高地へ。上高
地で冬山の荷物を木村氏宅にあずけ
る。帰途、中ノ湯に入る。気分爽快
であった。残留組の事は別に記す。

常念より涸沢へ

(L. 大関、鶴木、長谷川、有田)

10月15日 曇

鳥川(9:00) 大助小屋(11:

30) 一ノ沢小屋(13:10)

10月16日 曇

一ノ沢小屋(7:00) 一ノ沢右
岸にうつる(9:20) 常愈小屋
(11:10) 一ノ俣小屋(16:
30)

10月17日 雨

沈 澱

10月18日 晴

小屋(7:15) 横尾小屋(7:
55) 横尾本谷出合(9:00)
涸沢テント地(10:30)

千丈沢より涸沢へ

(L. 越田、森本、二谷、武田)

10月14日 晴

軌道は荷物のみのせてくれる。千
丈出合の無人小舎で泊る。

七倉(8:15) 東沢発電所(
10:30) 軌道終点12Km地
点(11:15~12:15) 湯俣
(13:10) 千丈、天井出合(
14:30)

10月15日

法政のテント場あたりで、沢の水
がきれいでいるので、ここをBCとす
る。

午後、偵察に出るが、A稜が簡単そ
うなので、越田、武田で登り、森本
二谷はAルンゼをつめて、北鎌接線

に出る。帰路は4人ともAルンゼを
下る。

千丈出合(6:40) 千丈沢テン
トサイド(10:40)

午後

テント(12:25) A稜取付点
(14:00) 北鎌接線(15:
00) テント(17:00)

10月16日 曇(ガス濃し)

沈 澱

10月18日 晴

予定日数が過ぎたのであきらめて、
涸沢へ向う。一日位食い延ばしも考
えたが、今日は岩がぬれた上氷りつ
いているので、無理せぬ事にする。
槍ノ肩では荷物を置いて、越田、森
本、二谷で小槍に登る。取付までの
北斜面は、氷りついているので、お
そろしかったが、陽の当る場所へ出
ると、快適なクライムが楽しめた。
その後北穂高岳へ向い、暗くなって
から、北穂の南稜を下るのは骨が
折れたが、皆よくガンバった

千丈沢(7:20) 西鎌接線(8:
30) 槍の肩(9:40)

槍ノ肩登(12:30) 大切戸(
15:00) 北穂高岳(17:15)
涸沢(20:00)

〔冬山乗鞍スキー合宿〕

参加

CL 大関 和夫 経3
伊藤久三郎 経4
二谷 和成 経2
飯田 進 経2
岡田 経管2
武田 雄三 経2
高津 克敏 経2
村上与利一 経管1
長谷川 恵一 経管1
有田 法学1
上田 環 経管1
後藤 洋 文1

上級部員による横尾根、槍ヶ岳縦走のサポートを行い、その後乗鞍位ヶ原にてスキー合宿を行う。スキーの他、アイゼンテクニックや雪洞訓練を行う予定であったが、上田が骨折した為予定を変更して、スキーの他は雪洞訓練を終わっただけで終わったが、スキーの方はかなりの成果があったと思っている。

12月21日

沢渡よりバスにて鈴蘭へ、鈴蘭より位ヶ原へ上る。本日より乗鞍岳スキー合宿始まる。先に入山していた伊藤、岡田と合流。

12月22日 晴後曇

屋根板の上で、直滑降の練習。
飯田、高津、後藤入山。

12月23日 曇後晴

午前、屋根板の上で、直滑降、前制動等の練習
午後、肩ノ小屋ヘッサーに行く。下る途中肩ノ小屋直下で上田骨折。宇宙線研究所でスノーボードを借りて位ヶ原迄下す。

12月24日 曇

上田を鈴蘭迄下ろす。鈴蘭よりタクシーで松本へ。大関、岡田が一括に行く。岡田は上田共に大阪に帰る。大関は夕方位ヶ原へ帰って来た。

位ヶ原(6:20) 鈴蘭(8:05)
鈴蘭迄(8:50) 三本滝(9:45) 位ヶ原(11:00)

午後は自由練習。

12月25日 雪

午前 } 小屋の横で前制動回転の練習
午後 }

12月26日 小雪

午前、小屋の横で前制動回転の練習。
午後、自由練習の後雪洞を掘り、大関、長谷川、高津が入る。
武田入山。

12月27日 小雪

午前、6時30分頃大関等雪洞より
帰る。

他は屋根板の上で直滑降、斜
滑降等の練習を行う。

午後、1時より雪洞を掘る。前日
のものをもっと良くする。前日
のは天井が凸凹していた為、
水滴が落ちてシユラフがずぶ
ぬれになった。

二谷、村上、有田雪洞に入る。

12月28日 小雪

午前、自由練習

午後 屋根板の上、20番の標示が
立っている所までツアーする。

後、自由練習

12月29日

フリー、各自自由に練習する。

12月30日

撤収。

伊藤、飯田、武田は残り全員下山。
途中、田辺、阿部、美田の冬充輩と、
槍ヶ岳までの縦走を済ました後の越
田、広瀬、藤安、森本が入山して未
だ、長谷川がこの連中と会って引返
して来た。

冬山

横尾尾根より槍ヶ岳縦走

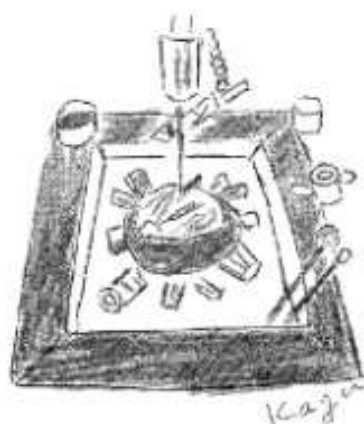
本文参照

春山

杓子東面合宿

本文参照





編集後記

○ まず初めにお読みの発行遅延の機嫌となつてしまつたのは、全て editor の不慮と苦慮の至りであり、申し訳ありません。

○ 甲南大学山岳部も漸く、大学山岳部としての新しい、積極的な活動の兆がみられるようになったのは、今後に期待したいところですが、部員の活発な通信、研究がこの時報にみられなかったことは残念なことです。

○ 先輩諸兄にお頼みした原稿は、集まりがあまりに少なく、この号は残念ながら「山岳部」は休ませていただきます。若手の〇日の方々の御意見を特に見解としては布んでいたのですが、次号には又にぎやかな「山岳部」を創出したいものです。(阿部公光輩には玉角をいただきますが、勝手ですが次号に載せさせていただきます。)

○ 時報の持つ意味、そして「報告」「部内雑談」と幾多の変遷を経て未だ山岳部報告のはたした役割と部の歴史を今一度よく考えてみる時期が来ていると思います。

○ 大学山岳部はノリ人の新人を迎え、今までにない新しい歩みを始め出しました。甲南山岳部の持つ良さを失わず、部員の一人一人が意気と情熱に燃えて、我が道を磨いて行つてほしいものです。

○ 山岳部(大学、高校)も山岳会も、もっと接触の機会を多く持ち、又それと共にお互いの遊樂しないように努力して行きたいものです。

○ どうにか降紙七号を出すことができましたのは、岡田、橋本、菅君等の皆様の協力と先輩諸兄のお力によるものだと、ここに厚くお礼申し上げます。

昭和36年11月7日印刷

昭和36年11月12日発行

——(非売品)——

編集者 大 関 和 夫

印刷所 神戸市東区永手町一〇一〇
天 宝 楼 印 堂

発行人 神戸市東区木山町同本
甲南山岳会・甲南学園山岳部

